

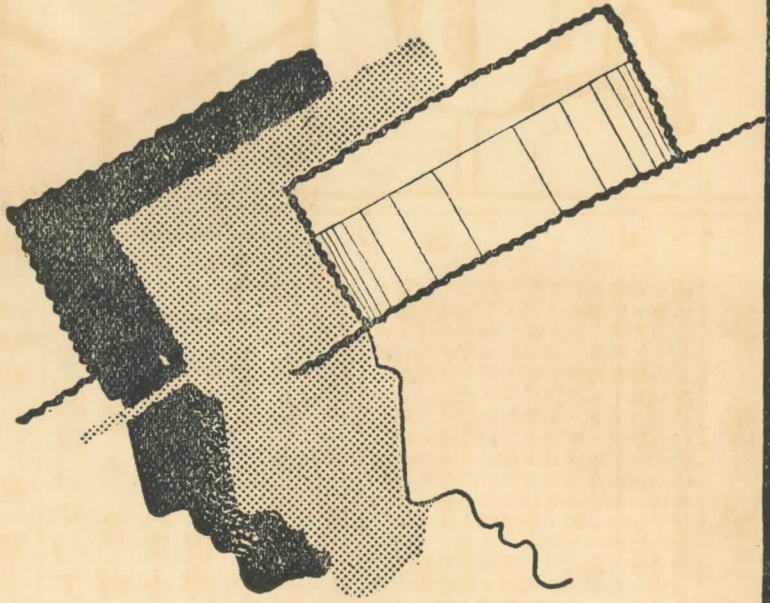
# 道類媛

第七年五月號

新助  
子



昭和七年五月一日發行  
三月廿五日發行  
三月廿五日發行  
三月廿五日發行  
三月廿五日發行



若葉の

# 初夏

帽子!

夏帽子!

三越のそれ

いゝ型を—

—東館二階—

大  
阪



# 三越



風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節日本御料理

# 芝居情緒と食道楽 喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

道頓堀戎ざし北詰

支店

大阪支店 北 新地 裏町

京都支店 木屋町ドングリ橋

戎橋 喜久屋北店開店

(心齋橋筋二丁目)





道頓堀 昭和七年五月號

第六十八輯

繪 口

中座五月興行◆新派幹部總動員上眞一「生さぬ仲」伊井蓉峰の次郎の瀧川訓導「二道筋」喜多村線郎  
 喜代菊枝柳松藤村秀夫梅上眞一「生さぬ仲」伊井蓉峰の次郎の瀧川訓導「二道筋」喜多村線郎  
 小尾上花柳幸一桂園寺清上「花柳」大矢市郎の桂川父子「雪」河合武雄の柳多郎  
 蜂屋安花の幸一桂園寺清上「花柳」大矢市郎の桂川父子「雪」河合武雄の柳多郎  
 東花美策伊真砂子渥美一柳正吉「菊枝」喜多村線郎の瀧川訓導「二道筋」喜多村線郎  
 伊子燕柳美太郎喜東村綠井清峰江川早苗の敏昇喜多村線郎の瀧川訓導「二道筋」喜多村線郎  
 晴子守新く山口越島多正之助荒島正吾二尾菊八子重井南五柳興行二道筋喜多村線郎  
 披露直前「辰巳柳の正之助荒島正吾二尾菊八子重井南五柳興行二道筋喜多村線郎」  
 淡海劇演子富永の撃手「淡海時次郎の妻昌夫の富永の撃手」淡海時次郎の妻昌夫の富永の撃手  
 龍浪線演子富永の撃手「淡海時次郎の妻昌夫の富永の撃手」淡海時次郎の妻昌夫の富永の撃手  
 樂太の不要々。醫學士系川。淡海時次郎の妻昌夫の富永の撃手。淡海時次郎の妻昌夫の富永の撃手。

◇表紙 『二筋道』……………村田政治

復興新派に寄せる  
諸家のこのと

生さぬ仲新釋論……………尾崎久彌 (六)  
 生さぬ仲漫談……………高谷伸 (二八)  
 何が新派を復興させたか……………倉田啓明 (一一)  
 新派劇と大衆小説の轉身期……………入江來布 (二六)  
 新派今昔物語……………西尾福三郎 (三二)  
 三頭目についての思ひ出……………森 ほんほ (三〇)

誌上舞臺

花柳巷談續 二筋道……………五月の中座 (二)  
 新釋 生さぬ仲……………同 (一四)  
 或る事實談 増上寺炎上……………同 (一一)



◇おほむ石「續二筋道」……………同……………(二七)

◇大當り「二筋道」……………小山紅路……………(二五)

◇淡海劇の一轉換……………桂田曉香……………(二八)  
 呀! 珍彈三勇士……………

◇大阪の萬歲……………花廼家華水……………(三三)

◇舞臺から……………

桂子の場合……………花柳章太郎……………(二七)  
 五月の役……………梅島昇……………(二七)

◇誌上萬歲……………

漫談道頓堀……………松葉家奴……………(三六)  
 阿良川歌江……………

◇阪大病院入院加療中の

守田勘彌……………(三一)

特輯

梨園情話

父の悩み子の悲しみ……………新谷誠水……………(四〇)

猿之助と若喜代

◇連載◇

京阪作者考……………(中の卷)……………瀬川春江……………(四四)

◇五月の芝居……………

新派劇と淡海劇案内……………(三八)

◇編輯後記……………(四八)

◇挿繪カッタ……………田中滿彦……………

の地心使なかや爽

# 磨齒煉ブラク

力ある健康の歡  
びは朝と食後の  
クラブ齒磨から



## 子刷齒ブラク

ロルセ産國  
の柄製ドイ



裂 小・具道小

# 貸衣裳

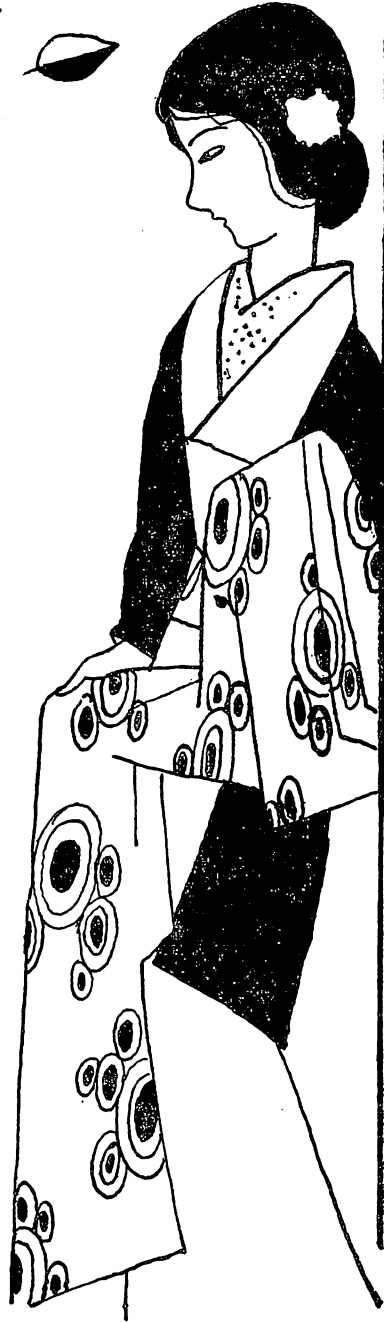
素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳

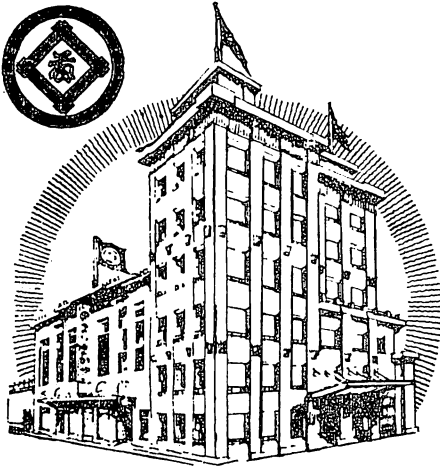
## 松竹衣裳部



(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)  
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます

本店  
東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内  
電話 戎 五 六 三 四 番  
東京市淺草區並木町十五  
園電話淺草 五 五 九 九 番



品質精選  
 百貨の充實  
 より御便利  
 よりお安く  
 奉仕第一

日本橋

松坂屋

大阪





◇ 仲 ぬ さ 生 釋 新 ◇

◇ 行 興 月 五 座 中 ◇

峰 峯 井 伊 ・ 導 訓 川 瀧



郎 綠 村 多 喜 ・ 子 代 喜

道 筋 二 續 柳 花 巷 〇 行 興 月 五 座 中

第二回



# 大阪の大競馬

所場

大阪市外八尾

(大軌上六ヨリ十五分)

雨天順延 午前九時ヨリ開始

主催 大阪馬匹畜産組合

期六  
月六

四日  
五日  
六日

併  
複勝式  
用

複勝式ハ

二着マデ

アングロス井ス

ミルクチヨコレイト

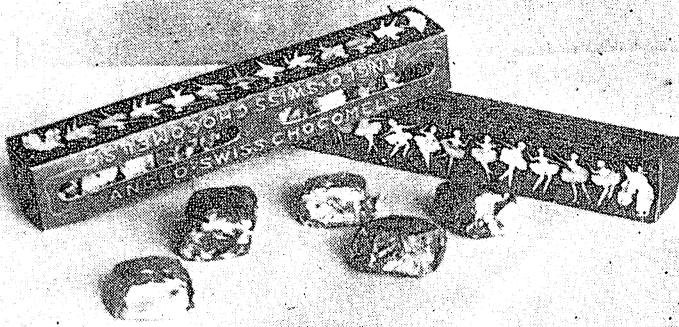
コーヒキヤラメル

チヨコレイト  
キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元  
株式會社  
横山商店

電話東(94)二〇六一番





雄武合河・がすお

道筋二續柳花巷

◎

行興月五座中

◇おす가의家の場◇



郎次市矢大・島飛父叔  
枝菊上尾・枝松娘  
郎綠村多喜・子代喜

昇島梅・吉將林小  
峰柳島川・子ぶの姉

中座五月興行

巷花柳談續二筋道

且那鈴村

藤村秀夫





◇ 喜代子の家の場 ◇



桂子・花柳章太郎  
おすが・河合武雄

竹の柱に葦蕈の屋根に

二枚延で暮らすとも

惚れた證據にやごんな世帯も

いとやせぬ

繪日傘や

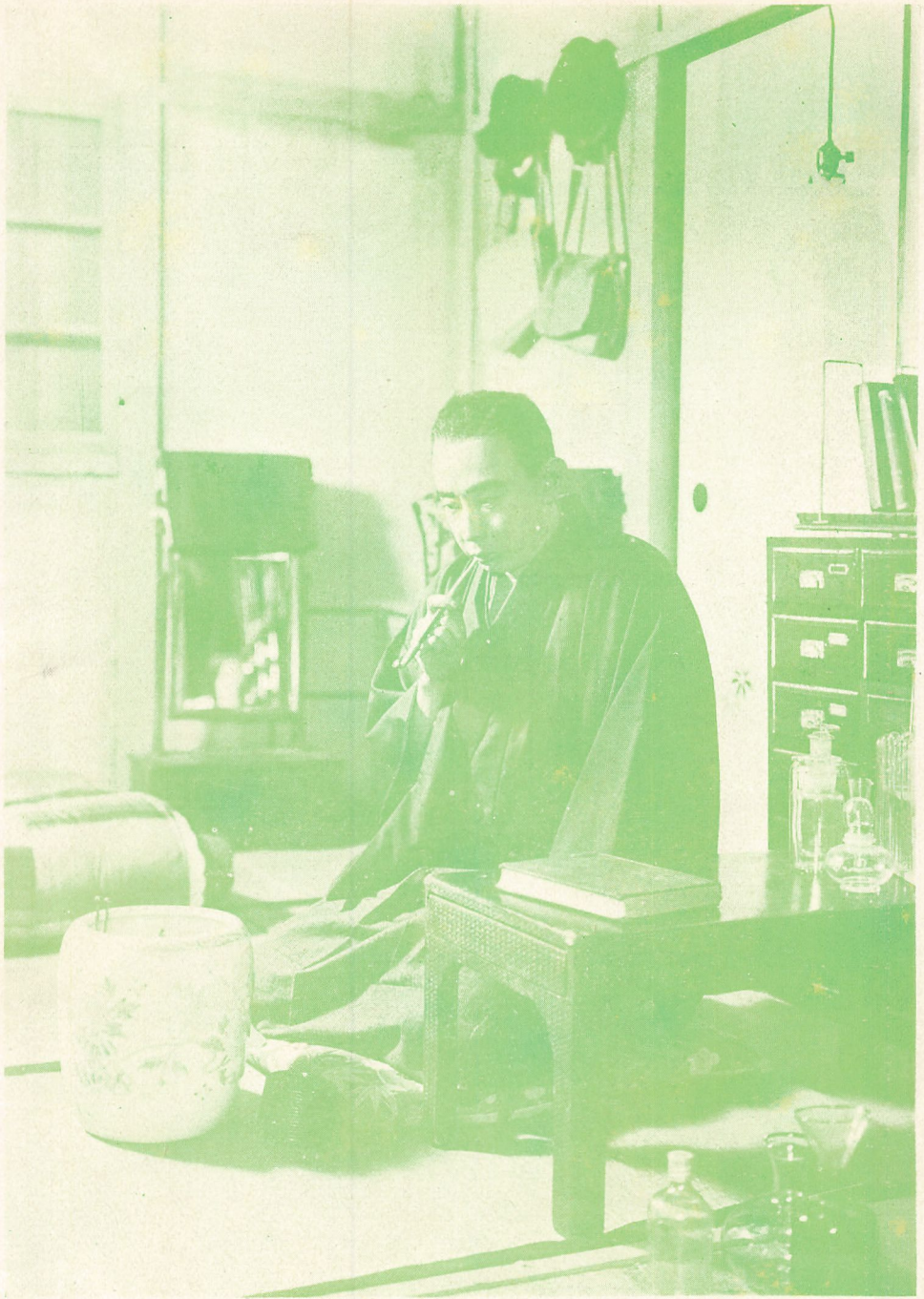
鈴のぼくり猫ぢやらし

繪に書いたやうな

うしろつき

かけぬけて見たら鼻びい

◇◇おすがの家◇◇



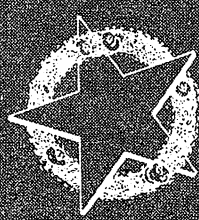
小 林 將 吉 ・ 梅 島 昇

行	興	月	五	座	中
---	---	---	---	---	---

道	筋	二	續	柳	花	談	巷
---	---	---	---	---	---	---	---



お顔の  
あぶらを取るには  
是非!!



あぶらとり  
かみ

あぶらとり  
かみ  
髪取紙



発売元 大坂 朝日堂株式会社  
製造元 大阪 中田スキナ屋

便所の防臭に困る方は今直ぐ

製創氏郎太彪林 士學藥



（錢拾五金小瓶一定價）  
圓壹金大



△使用法

一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

到る處の藥店

各百貨店に販賣す

家庭必備品

使用簡潔  
十滴奏効  
無害無毒

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがありません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の薬（カンブラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが残らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

元 賣 發

電 話 本 局 三 三 一 五 番  
電 話 本 局 三 三 一 五 番  
電 話 本 局 三 三 一 五 番

會 商 榮 光

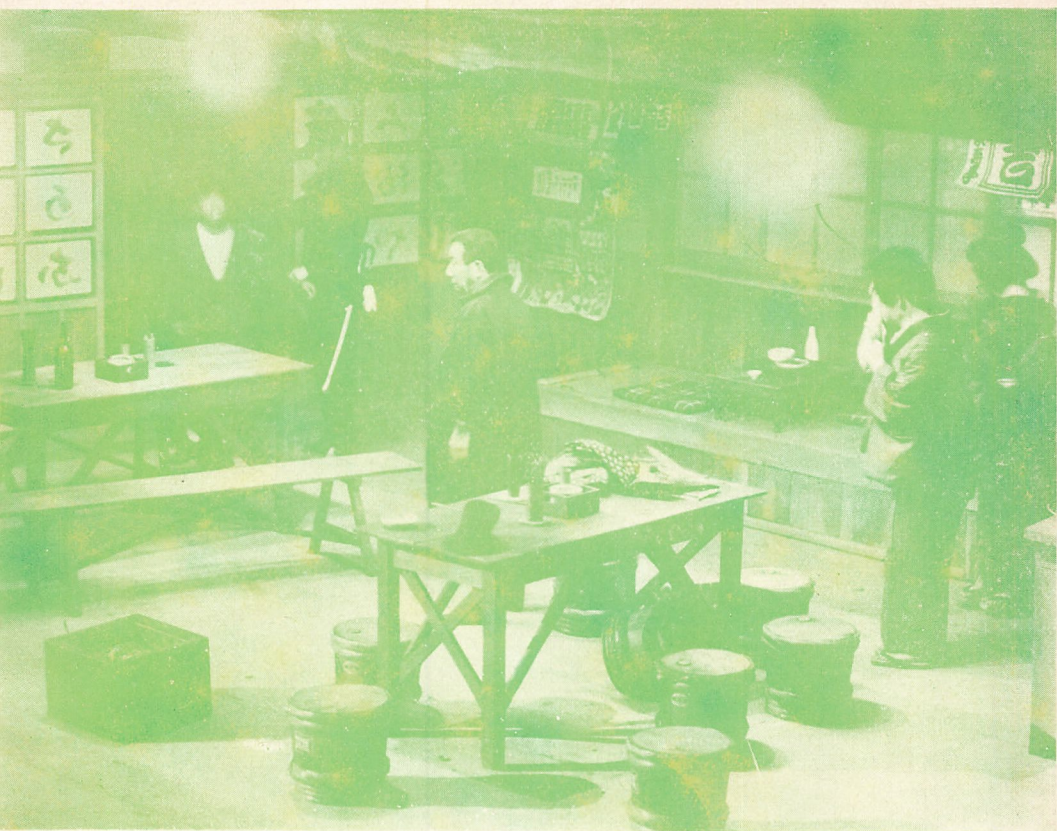
大 阪 市 東 區  
大 阪 市 東 區  
大 阪 市 東 區



郎太章柳花 ・ 子 桂

行	興	月	五	座	中
---	---	---	---	---	---

道	筋	二	續	柳	花
				談	巷



一幸和花・查 巡 峰 蓉 井 伊 ・ 吉 安 屋 桶 枝 菊 上 尾 ・ 雪 お 娘  
 清 好 岡 片 ・ 太 順 順 峯 井 伊 ・ 吉 安 屋 桶 雄 武 合 河 ・ よ と お

上 炎 寺 上 増 る 或  
 談 實 事

場 の 屋 飯 町 松 濱

巡査、順太の手を取つて引いて行く、  
 場面に涙しめる。

順太（入口で振返つて）おぢさんいっ  
 お母さんに逢へるの？

安吉（胸がつかへて）あさつてか……

しあさつてか……

ト、涙が言葉を途切らしてしまふ。

順太は二人の聲官に引かれて去る。

安吉は入口に立つて後影をどこまでも  
 見送る。

お雪に話を聞いてゐたおとよはすゝり  
 泣く。

お雪はおとよの胸に顔をうづめて泣き  
 朝れる、雨

安吉、衷心したやうに入口の戸にもた  
 れて、

無意識にのれんの片端を持つてぼんや  
 りと暗い天井を見詰める、

品川灣にボーツとさみしい汽笛が鳴る  
 夜はシン／＼と更けて行く。



『新釋 生さぬ仲』

瀧川訓導 伊井蓉峰  
 渥美俊策 梅島昇  
 渥美滋 伊東薫  
 眞砂子 花柳章太郎

清岡球江 喜多村綠郎



中座五月興行



峰 菘 井 伊 ・ 導 訓 川 瀨  
昇 島 梅 ・ 策 俊 美 渥

枝 菊 上 尾 ・ 子 敏  
郎 太 章 柳 花 ・ 子 砂 眞

新  
釋  
生  
さ  
ぬ  
仲

清 渥 岸  
岡 美 代  
球 卷  
江 滋 野

喜 伊 柳  
多 東 永  
村 東 二  
綠 薫 郎  
郎 薫 郎



若き妻君 敏子・尾上菊枝



おみくじ

ほの暗い神社の前、遠く拜殿が見える、  
杉の木立の中、上手に占の店がある。

下手に石たゝみが續いて、表の鳥居の方  
に行く。

たそがれ―九時―拜殿の奥に、たった一  
ツ提灯の灯が見える、  
小雨が降つて居る。



吾正田島・吉佐の川荒

仁俠の子守唄

佐吉の心境

あの子の手足をのはすまでには、あしあごんに苦しんだか、うぬの想ばかり考へず、一寸たあ貧乏人の心の底も察して下さい、憎いあんた、憎いお八重だ、死んでもあいつ等にこの児を見せるものかと思つてゐてもね、乳をさがして泣き立てられ日に／＼顔が瘦せるのを見ると、憎いあんた達がゆかしくなり、おらア雨のシヨボ／＼降る晩など、實は根岸の寮の所をうろ／＼うろついた事もある、二階を見上げてあすこには、餘つて捨てる乳があるものを、大に吠へられ雨にうたれ、子を軒下にこゞへてゐると――怒むなにも涙が先立ち、ねんねんころりの子守唄を歌つた時は元締おれあ――辛かつた／＼、それから月日がたつにつけ、男やもめの悲しさにはあの子のふくろびが下つても、おれの手では縫つてやられずブラン／＼と下がる神を觀世よりでははつてやる時、おりや丸線と云ふ奴は、鬼か蛇か、死んでもこの想は忘れねえと、毎晩ねかしなに念佛にお前達の名をのろつて寝すんだのだ、大思ある沼屋町の頼みでも、この事ばかりは、いやだ、死んだつてこの兒だけははずものかと思ひつめても来てみたが、あつしの手許で育てられるよりやあ、實の親々に可愛がつてもらへば、行先ともにあの子の仕合せだ、あつしや總てを見切りませう……。





お八重・二葉早苗・お卯之吉・新久松喜世子・荒川の佐吉・島田正吾・権左衛門仁之助・榎屋五郎・中井哲・卯之吉・山口越夫・権左衛門仁之助・島田正吾



佐吉は旅の空にゐても、一生涯親分と名のついたものは持ちませ  
ん、鐘馗家に事があると聞けば佐吉はいつでも飛んで歸ります。  
佐吉さん、おらあ、お前に別れたくねえなア、何を仰有るんだ、  
は、は、は。

朝日に匂ふ山櫻花とか云ふのは、ありや伊勢の學者の歌だといふ  
が男の氣性はそこを狙つたもんだ、こら、大川を登る朝日に映えた  
今日のこの櫻を一生忘れなさんなよ、佐吉さん逢者で暮して下さい  
よ、

お父つあん、

お、坊も逢者でゐろよ、

お父つあん、

やけに散りやがる櫻だ。

『探偵劇  
結婚披露直前』



郎太柳巳辰・部警條上

行興月五座南

・

劇國新

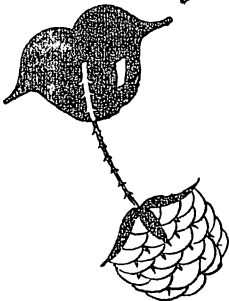


東洋一の豪華を誇る社交場の最高峰

合資会社

# 高橋回食堂

CAFE TAKAHASHI



- 心齋橋高橋
- 堂元サロン高橋
- 新世界高橋
- 天四高橋
- 京都高橋



粉白粉一ピツカ

佛國ハリー・セラミー會社製  
世界的優秀化粧品カツピー化粧品

カ  
ツ  
ピ  
ー  
化  
粧  
料

ンロコデオ・ンヨシーローヤへ・水香  
 (色各) 粉白粉・水香ツトレイト  
 (色各) 紅頰・(色各) トクパンコ  
 鹼石粧化・鹼石リモ髭・(色各) 紅口  
 油香・一ダウパークルタ・洗髮  
 ムーリク・油練・ンチンラリブ水  
 切一他其・品粧化・箱合取用物造

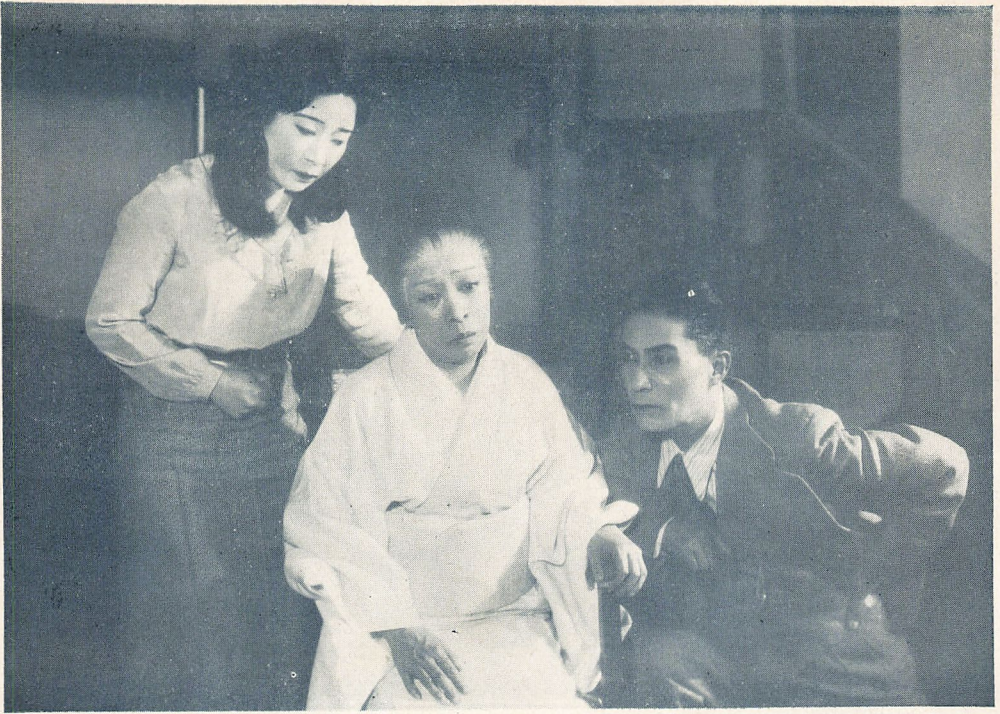
ホカ  
スツ  
ビ  
ー  
化  
粧  
料  
カ  
ツ  
ピ  
ー  
化  
粧  
料  
オ  
ヨ  
リ  
ス  
ワ  
ジ  
オ

輸  
入  
元



水香一ピツカ

大  
阪  
大  
浦  
彌  
商  
店

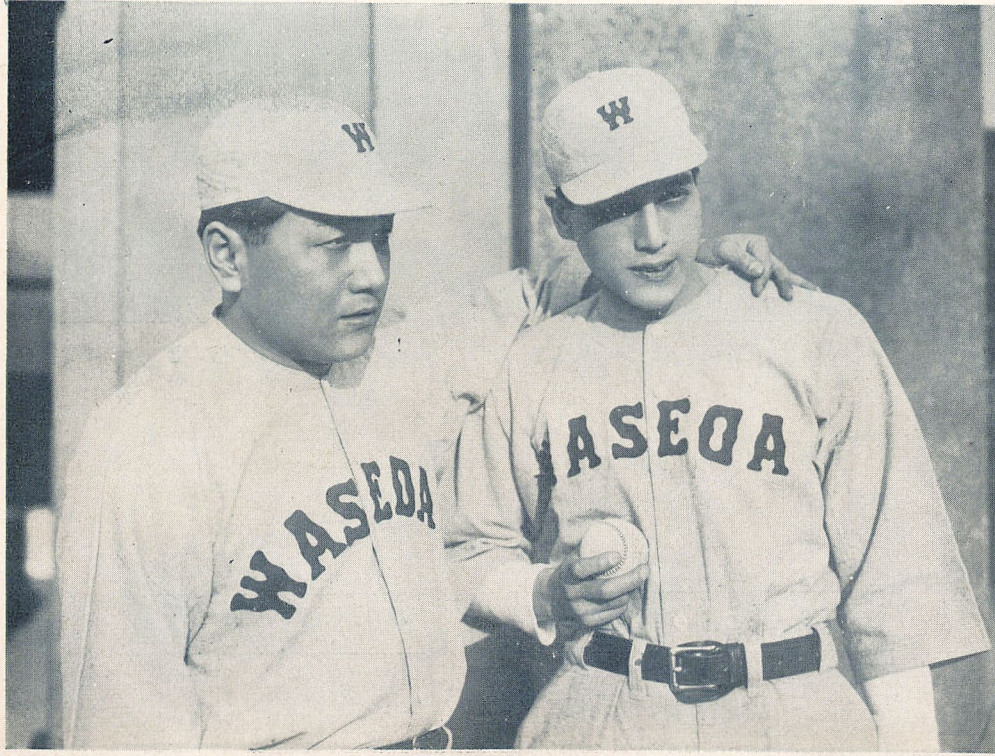


子優鳥永・子りゆ祇白 子世喜松久・子辰祇白 夫正月秋・郎太京間福

劇 國 新・行興月五座南

夫鶴田藤伊・手擊遊永富  
繁木高・將主木黒

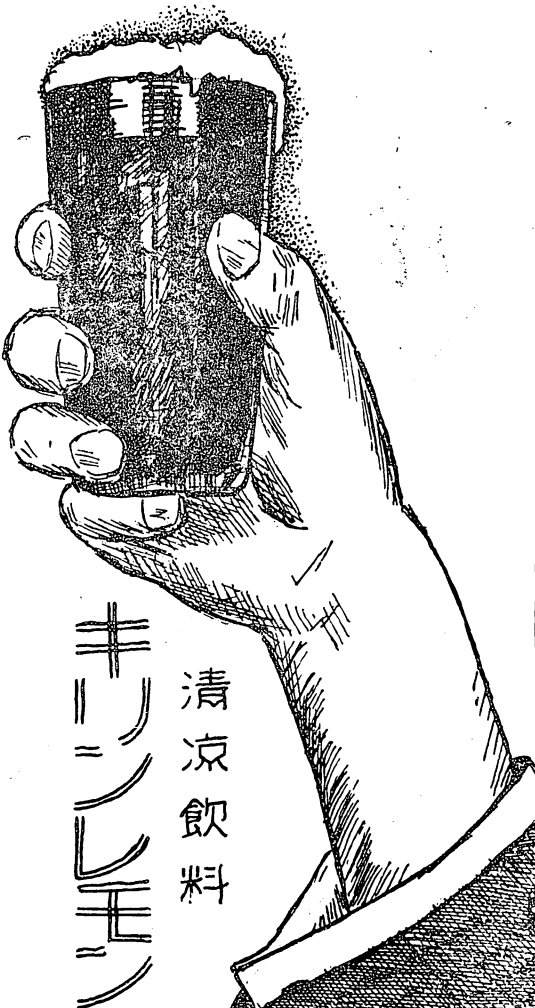
(定豫の場上り替の二) 『手擊遊永富』





海 淡 ・ 也 哲 村 大      次 時 ・ 子 昌 妻

# キリンビール



清涼飲料

キリンビール

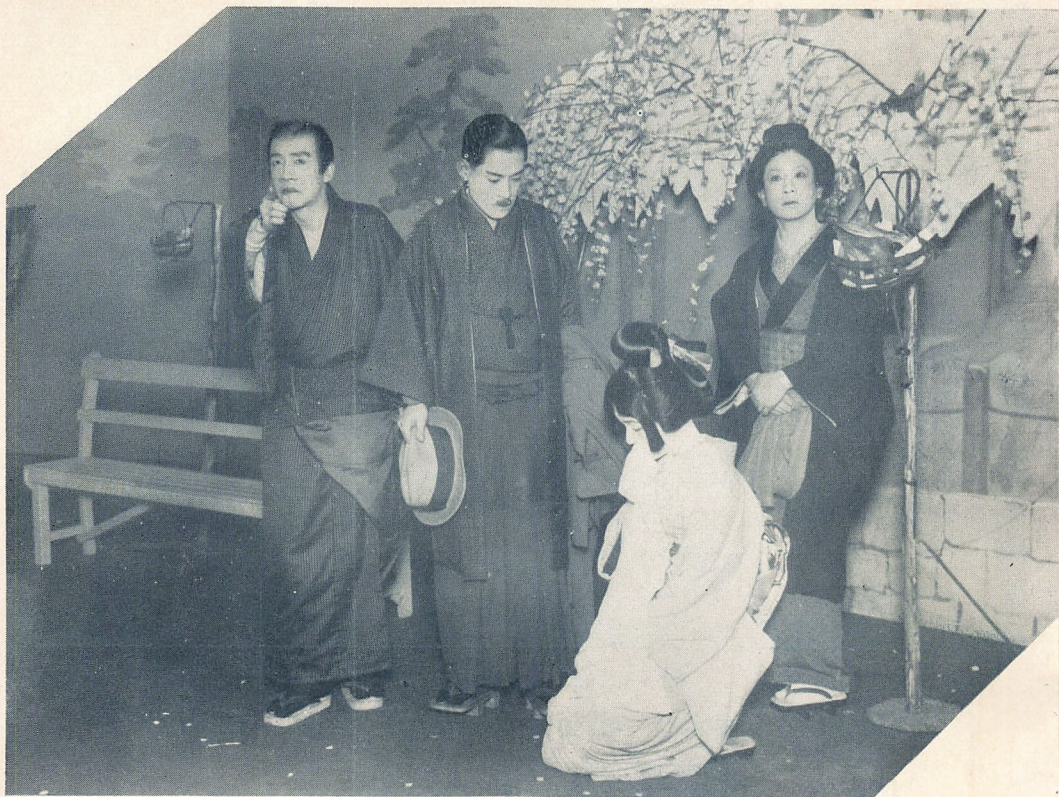
三ツカシ酢

同内岩御用達

中林酢







藝妓屋葛屋主人	醫學士 糸川	藝妓 葛龍	女將 おつた
・	・	・	・
淡海	浪線	里路	龜鶴



五月の浪花座・淡海劇



場 の 離 別 景 四 第

太 樂 ・ 々 要 不      慶 辨 ・ 平 茶 安      海 淡 ・ 々 開 西



◇ 五 月 の 浪 花 座 ・ 淡 海 劇 ◇

◇ 呀 ! 珍 彈 三 湧 士 ◇

支 那 軍 ナ ン セ ン ス

不朽の名篇 菊池幽芳氏一代の傑作

# 月 魄



新興が誇るべき  
本格的豪華版

春の超特作

森 静子 主演

河津清三郎 現代劇  
初出演

高津慶子 特別出演

太秦現代劇部 總出演

渡邊新太郎 監督

川崎常次郎 撮影

八尋不二 脚色

太秦撮影所  
新興キネマ

# 竣工迫る大阪歌舞伎座



# 注文：

新劇場歌舞伎座に  
對する皆様の御注文

# ？

## 竣工

迫る大阪歌舞伎座は、未來の大阪文化發祥の泉として、また新時代の演劇萬華鏡として、あらゆる文化的機構を整へ、今秋十月愈々落成！

就きましては、此際、内外の設備に一層の完璧を期し、こゝに新劇場歌舞伎座に對する皆様の御希望を左記各項に涉り御聞きし、更に皆様の歌舞伎座としての面目を樹立したいと存じます。何卒奮つて御寄稿下さいませ。

- 一、大劇場としての萬般の設備について
- 二、レヴュー及び映畫劇場としての御希望
- 三、社交機關としての附屬設備について
- 四、大衆娛樂設備としての附屬設備について
- 五、サーヴィス番般について
- 六、其他新劇場に對する御希望等に御氣付の點をお聞かせ下さい

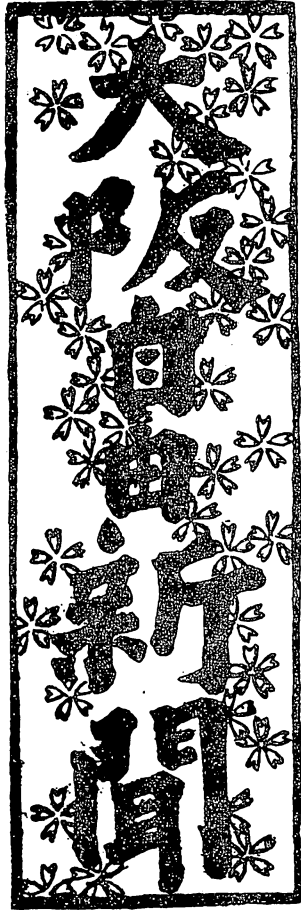
◇御投稿はハガキで左記へお願ひいたします◇

大阪市南區久左衛門町八

松竹興行株式會社大阪支店内

歌舞伎座假事務所

社長 加藤蘇光



刊 夕

# 新興戲曲

●●● 5月號

40 SEN

發行所

東京市神田區表神保町二

新興戲曲社



最高の水準！  
最大の夕刊！

毎日 6ペエチ  
1ヶ月 50セン！

申込は 北尾新聞舗

土曜版

300,000部

大阪全市無料配布

絶対多数の愛読者網

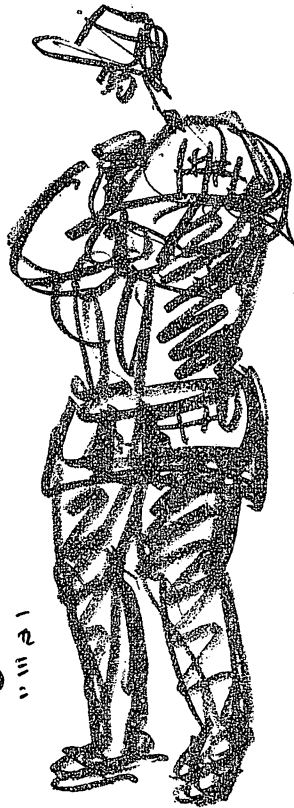
雜誌 · 新演劇 · 月刊

五月號

# 演劇類編

第七年

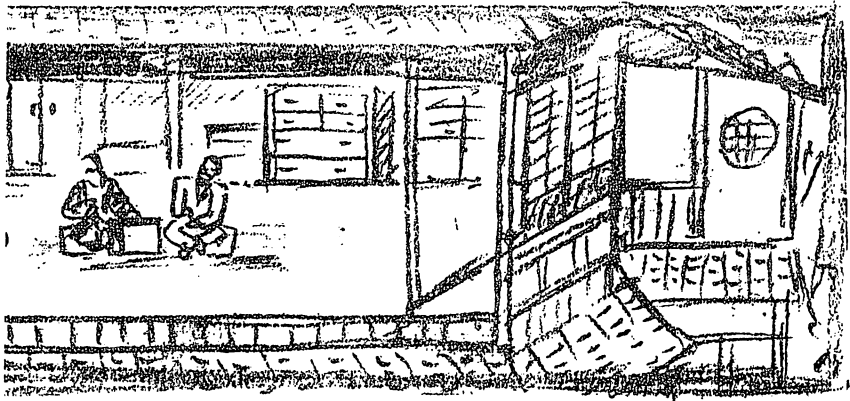
第六十八輯



中  
五  
月  
興  
行  
増上  
上  
上  
上

植  
凡  
山  
安  
吉  
伊  
井  
夢  
峰

一  
三  
三  
三  
三  
三



瀬戸英一作

花柳續二筋道

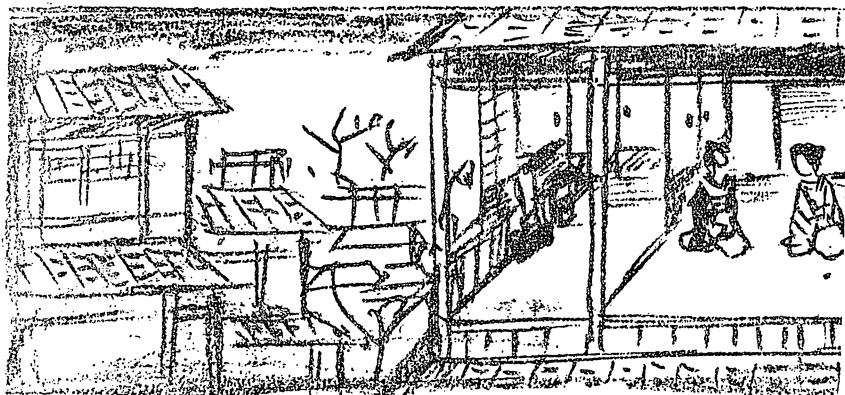
四二場幕

五月の中座

【前篇迄の梗概】 生絲商阿久津謙三は阿久津商會主として一時はならしたものでしたが商賣上の失敗から店、工場は閉鎖。破産の身をこらして世話をしたる藝妓喜代次の家に寄せて居りました。一日、此の喜代次の家に訪づれたのが元藝妓で、今は堅氣の薬屋の女房になつてゐるおすがと云ふ喜代次と仲のよい朋輩です、おすがは阿久津が喜代次の留守を守りながら、如何に他にたすべき用事がなるとは云へ、有りし日の面影も失せて、自分の食膳の支度や、臺所の用事迄まめしく立働くのを見ては、泌々情なき不甲斐なきを感ずるのでした。そして、又若し此のまゝの生活が今少し続けられたならば、阿久津謙三からは全く活動力と云ふものは消え失せて了ふであらう。阿久津を現在のまゝで朽ら果て

させる事が喜代次としては眞に阿久津を愛してゐる事になるであらうか……否、眞の愛とは一時のつらさを忍んでも戀しき人の立身出世を願ふのこそ、それであると思ふのでした。斯くておすがは阿久津の爲に喜代次に判れ話を勧めますので、喜代次は涙する心に鞭打つて、遂に阿久津と別れる事になり、阿久津も又喜代次の此心をよく解し、家運挽回の爲、罪なき愛兒の爲に此家去つて更生の天地へと向ひます。こうして阿久津はそれこそ死に物狂ひになつて店の再興に努力しましたが、其勞は空しからず、三年後には以前に勝る繁榮を見るに至つたのです。阿久津は此の現在の幸福を思ふ毎に没落時代に於ける喜代次の誠心からなる親切愛情が忘れられず、其恩の萬分の一だに報ゆる事が出来ればと、月



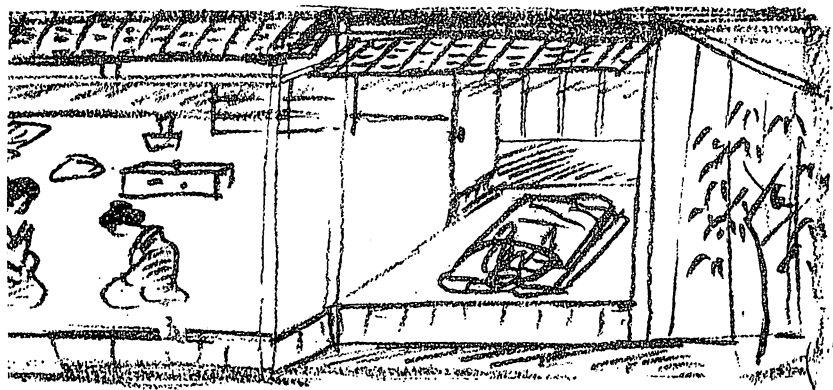


々莫大な手當てを出して喜代次と元の如き關係を續けて行く事になつたのです。

然して、阿久津謙三の心にはいつとはなく次のやうな事が考へられ始めたのです。自分は今喜代次に月々手當てを出して、何の物質的苦勞もなく過ごさせてゐるが、此のまゝでは所詮喜代次の生涯と云ふものは日蔭のものである、是が果たして眞實に喜代次を幸福にさせたと云はれるであらうか。……否々決してそうではあるまい、眞に喜代次の幸福を思ふならば、彼女を此の日蔭から引き出して、明るい生活を與へてやらねばならない。この明した考へに達着した阿久津は一日喜代次を訪れて「……決して責任を回避するんぢやない。お前が今の状態を満足してゐてくれるなら、俺は死ぬまで前のお世話をして行く……」が、此際、若し、お嫁に行く先もあるなら俺は喜んでお前に嫁入りの荷物を作つてやりたいのだ……と云ふのでした。喜代次にも此の阿久津の誠心はよく分ると共に、或日彼女がおすがの家を訪れた時に、其處で會つたおすがの夫の弟従、村岡晋二の帥らぬ人間味と云ふものに少からず感動させられてゐたのです。そして現在の自分は阿久津のお蔭をもつて如何にも幸福ではあるが、否々幸福で

あるが故に、却て現實の人生と云ふものに對して眞誠さといふものを忘れさせられてゐる様な、何とはなしに物足りなさを感じてゐたのです。それで若しか村岡が自分のやうな者でも妻に持つて呉れるなら……と思つてゐましたので、此の旨を阿久津に打ち明けるのでした。阿久津は心からは喜び此處に二人は再び別れる事になります。

こうして喜代次は愈々村岡晋二の妻となりましたが、諺にも「好事魔多し」の通り、阿久津が掌中の珠と愛で、一人の爲に生きてゐると云つてもよい程熱愛して居た娘玉江が、學校教育の無味乾燥に幻滅を感じて自殺して了つたのです。實際是は阿久津にとつては死刑の宣告を下されたと同じです。然して不幸なのは阿久津だけではありませんでした。喜代次も結婚後間もなく夫晋二に先立たれて了つたのです。それと共におすがも生活の爲に二度左遷とる身となつたのです、そしてこのうした境遇にある三人が、一日ゆくりなく落ち會ひ、最愛の娘に別れた阿久津、共白髪とまでと誓つた夫にとり残された喜代次とは又、昔の如き仲に立ち歸らうとしましたが、結局喜代次は亡夫に操を立て通して、三人三様、各の運命を辿り行く事になります。



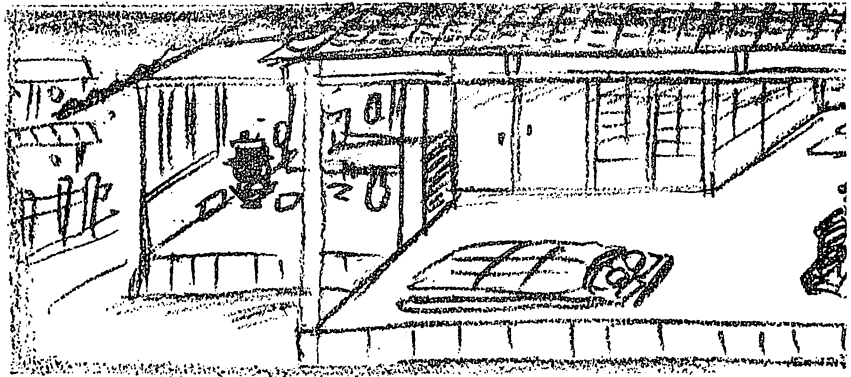
三人が此の様に變化の多い生活をしてゐる時、いゝ旦那を持つて暢氣にくらしてゐたのは、喜代次の朋輩桂子でした、彼女も曾ては堅氣の家の妻になつて見たくて堪まらず、無理に喜代次に頼んで、おすがの家を訪づれ村岡晋二と見合をした事もあつたのですが、それで堅氣の女房であるおすがの、氣苦労の多い事や、生活苦の實際を沁々と見せつけられて、斷然お嫁入りを中止して了つたのです。今度は其後の桂子の事から始まります。

桂子の旦那は鈴木と云つて、金も有り氣立てもよく、桂子を大切にするとはいゝ旦那なので、それで桂子も此の旦那には心から盡してゐるのですが、或日桂子は、日比谷の公會堂で偶然にも、彼女には忘れる事の出来ない初恋の男、齊木と云ふのに出會つたのです。勿論其時桂子は何一つ言葉も交へたのではなく、初見の目撃が今更のやうにこみ上げて來て堪まらないのでした。

然し一方自分の身を顧みれば旦那のある身の上で、其旦那にも自分は心を引かされてゐるので、一體どうすればいゝかとさすがに惱みますと、偶然な事が起ります。それは齊木

の姿を見て心の浪立つまゝに深酒をした翌日の事です。頭が重くて晝過ぎまで床の中に居りますと、母親が抱妓の事で彼女を訪ねて來ました。桂子の旦那は先にも申しました様にいゝ人なのですが、どう云ふ譯か桂子の母をすかず、其爲桂子は母を別居させてゐるので、母が久し振りにそれも用があつて來てゐる處へ、旦那が又いよつくりやつて來たのですが、嫌ひな母親が來てゐるのでムツとした旦那は桂子と二言三言云ひ争つたまゝ、斷然別れると云つて歸つて了ひます。常なれば桂子も何とか旦那の心を柔げたのでせうが、齊木の事があるのので「勝手にしろ……」と云つた氣持になつて了ひます。ト其あとへ思ひがけなくも戀しい齊木から電話がかゝつて來ますので、桂子は夢かと喜んで兎も角も自分の家へ來て貰ふ事にします。

間も無く齊木は姿を現はしましたが、その齊木は昔の齊木でなく、ある政黨の院外顧問かですつかり政治家氣取りで居りますので、桂子には口をきくさへムシズの走るやうな氣障な人間の氣がするのです。沁々幻滅を感じた桂子は腹の立つまゝに頭から齊木をけなし始めますので、とう／＼齊木は怒つて歸つて了ひます。後で母は鈴木と別れては行末が心



配だとして居るのを、どうする事も出来なかつた。それにもう一つ、藥劑師の試験に落第した事も餘計彼を焦々させてゐるのです。こうした胸に悶えがあるので、喜代子を前にしてもやけ酒をあふつたりして居りましたが、又其處へ歸つて来たおすが一杯氣嫌で、其處迄桂子と鈴村に送つて来て貰つたから、鈴村に挨拶をして呉れと將吉に云つたのが因で、將吉は俺を暫間扱ひにするかと、ト打つ蹴るの大騒ぎとなります。そして酒が云はせるのかおすがも、それとは露骨には云ひませんが、自分が働けばこそと云つたやうな事を口にします。益々喧嘩に華が咲くばかりなのです。此時喜代子には、フト成程と肯れた事があります。それはおすがの云ふ事を聞いてゐて、おすが自身では決してそうした氣持を抱いてゐるのでないが、知らず／＼に自分が此家の働き手だと云ふ氣持が芽を出して、自然將吉の胸にそれが響き延いては將吉の煩悶の種と化して行くのではなにか、こう思ひ及んだ喜代子は訝々とおすがを説きます。おすがも始めて無意識の内にそうした氣持を醸してゐたのかと思つては今更の如く自分の身がかり見られるのでした。

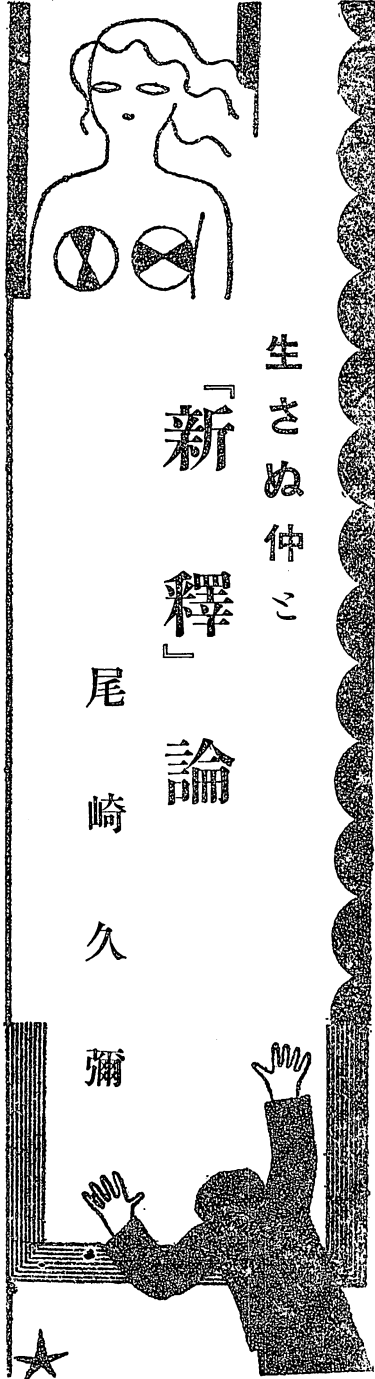
配だとして居るのを、どうする事も出来なかつた。それにもう一つ、藥劑師の試験に落第した事も餘計彼を焦々させてゐるのです。こうした胸に悶えがあるので、喜代子を前にしてもやけ酒をあふつたりして居りましたが、又其處へ歸つて来たおすが一杯氣嫌で、其處迄桂子と鈴村に送つて来て貰つたから、鈴村に挨拶をして呉れと將吉に云つたのが因で、將吉は俺を暫間扱ひにするかと、ト打つ蹴るの大騒ぎとなります。そして酒が云はせるのかおすがも、それとは露骨には云ひませんが、自分が働けばこそと云つたやうな事を口にします。益々喧嘩に華が咲くばかりなのです。此時喜代子には、フト成程と肯れた事があります。それはおすがの云ふ事を聞いてゐて、おすが自身では決してそうした氣持を抱いてゐるのでないが、知らず／＼に自分が此家の働き手だと云ふ氣持が芽を出して、自然將吉の胸にそれが響き延いては將吉の煩悶の種と化して行くのではなにか、こう思ひ及んだ喜代子は訝々とおすがを説きます。おすがも始めて無意識の内にそうした氣持を醸してゐたのかと思つては今更の如く自分の身がかり見られるのでした。

配だとして居るのを、どうする事も出来なかつた。それにもう一つ、藥劑師の試験に落第した事も餘計彼を焦々させてゐるのです。こうした胸に悶えがあるので、喜代子を前にしてもやけ酒をあふつたりして居りましたが、又其處へ歸つて来たおすが一杯氣嫌で、其處迄桂子と鈴村に送つて来て貰つたから、鈴村に挨拶をして呉れと將吉に云つたのが因で、將吉は俺を暫間扱ひにするかと、ト打つ蹴るの大騒ぎとなります。そして酒が云はせるのかおすがも、それとは露骨には云ひませんが、自分が働けばこそと云つたやうな事を口にします。益々喧嘩に華が咲くばかりなのです。此時喜代子には、フト成程と肯れた事があります。それはおすがの云ふ事を聞いてゐて、おすが自身では決してそうした氣持を抱いてゐるのでないが、知らず／＼に自分が此家の働き手だと云ふ氣持が芽を出して、自然將吉の胸にそれが響き延いては將吉の煩悶の種と化して行くのではなにか、こう思ひ及んだ喜代子は訝々とおすがを説きます。おすがも始めて無意識の内にそうした氣持を醸してゐたのかと思つては今更の如く自分の身がかり見られるのでした。

生さぬ仲こ

「新釋」論

尾崎久彌



「生さぬ仲」が、新釋せられて、最近に上演せられるさうである。その新釋「生さぬ仲」に就いて、といふのであるが、私はまだその新釋の程度と、延いては、内容を知らない。たゞ「生さぬ仲」の新釋が、上演せられるに就いての感想を若干述べてみたい。



「生さぬ仲」は、その原作、は明治末から大正劈頭へかけての新聞連載小説だった。新聞では愛讀した。所謂家庭小説だったが、柳川春葉氏が、窮して活路を見出されたかと思ふ程、脂の乗つた作のやうに讀まれた。勿論春葉氏は、その作以前から家庭小説的の傾向はあつたやうだったが、とにかく幽芳氏の「己

が罪や」「乳姉妹」や、懸賞小説の中村春雨(吉藏)氏の「無花果」以後、暫くぶりの家庭小説としての天下の讀者を惹きつけた作だった。莫迦らしいと思ひながら私は、やはり忠實な讀者の一人だつた。鰭崎英朋氏の毎日の挿繪も待たれた。英朋氏描く所の「眞砂子」が、どんなに巧かつたか。似顔繪のコツを以て描いたのか、毎日事件の進むに従つて服装や境遇が描き分けられて行きながらも、此の「眞砂子」の顔だけはいつも似てゐた。巧いなあと感心した事だつた。柳川春葉氏をして一躍家庭小説の大家として、西の菊池幽芳氏に拮抗する者としたのは、とにかくこの作ではなかつたか。春葉氏の晩年の一新活路として、その晩年を飾るにふさはしい、寧ろ春葉氏の従來の作にあき足

らなかつた——同門の小栗風葉氏、自然主義の潮流に乗り流行、徳田秋聲氏又堅實に緩みを見せぬ。鏡花氏、昔ながらの独自の流川訓導

岡井英谷峰



義全盛時代の明治末によくその存在を裏つけたのに——その春葉氏が、思ひもかけぬ「生さぬ仲」がとにかくこれに於て、同氏は大衆に生きた。その天下を席捲した（この形容は事實である）様子は今日の大衆小説の如き比ではない。春葉がくだらぬ所に、復活しつゝ、あるな、と高級を以て自認する者たちも、半ば以上その価値を落しめようと圖りながらもその復活の偉大さと、豫想以上にその大衆に迎へられたのには啞然とした。まして新聞に掲載の半ばにして、既に京都、大阪に劇として脚色せられて上演、東京に於ても間もなく上演、當時の映畫は今日に比べては幼稚であつたもの、映畫として亦到る處に興行効果を奏した。私は、芝居も映畫も見たおほえがある。

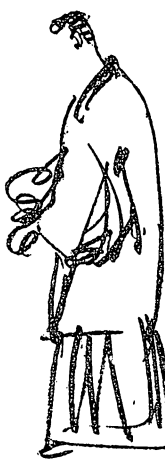
ファンを持つといつた時に於て春葉氏はその存在は餘りにパツとしなかつた。風葉氏の門下といふべき眞山青果氏の如き春葉氏の後輩の如き觀ある人々も自然主



芝居として上演せられたのはその最初は新聞に掲載半ばであつた一月（大正二年）の事で、京都の京都座である。引續き大阪の浪花座で二月興行として上演。京都座では熊谷、酒井信一、福井、都築、静間の一座。浪花座では秋月、我童、木村、井上（正夫）、村田の一座で大阪のは新舊の合同である。配役の主なるもの、俊策が京都では熊谷、大阪は秋月。眞砂子は京都が酒井信一、大阪が我童。巻野が京都では都築、大阪では井上正夫。日下部が京都では静間、大阪では村田といつた工合で、場割も京都と大阪とは大同小異で小異の異はあつた。が此等のくはしい事は大正二年三月一日發行の演藝畫報（第七年第三號）に載つてゐる、大阪のを中心とした「見たま、」も載つてゐる。熱心な讀者は、同誌の記事記録を参照ありたい。

演藝畫報の此號、別に「浪花座」として、浪花座生さぬ仲の評判記がある。それに「開場當日から、毎日々々引續いての満員大入、この幾十年といふもの、道頓堀に見られなかつた大人氣だといへば、略その觀客受の程度も解るだらうと思ふ。」なほ曰く、「この劇は、筋書でも解る通り、いかにも山の多い、小細

浪花後集 梅自山果



工の澤山な、随分眼に立つ程な補綴はあるが、それだけに観客受はよく、殊にまた初めから終まで、眞砂子の境遇に涙のありつたけを絞らせるやうに出来てゐる事として何よりも泣く事の好きな上方の好劇家の好尚に投じて、毎日々々の満員続き、その人氣に推倒されて、大阪中の興行場は言ふに及ばず、東は名古屋から、西は神戸まで、どの劇場もどの活動寫眞も「生さぬな」でなければ、客が呼べぬといふ大流行、松竹合名會社では追つてこの浪花座一座を西から東と順々に、打つて廻る計畫だと洩れ聞いてゐる」と、随分の提灯であつた。

◇ 東京での初演は、同（大正二）年十月の新富座、壽美藏、猿之助の一座が、さうらしい。十月八日が初日で、猿之助の氏家秀矩、左升の巻野大造、松蔦の眞砂子、壽美藏の俊策、秀詞の球江、又五郎の目下部、日出夫の少年滋部、といった役割だつた



眞砂子 花柳屋大印

かに書いてゐる。演藝畫報の大正二年十一月號（七ノ十二）に、それがあつた。劇評そのものよりも、その前書ともいふべき、かうした新聞の而も通俗小説を上演するに就ての原作者として並

に文藝人としての、春葉氏自身の言葉がある。中々に思ひきつた物の言ひ方で、而も謙讓とも受取れる程の言ひ方である。その數言は今日に於ても眞理であらう。記憶のために摘録しておく。

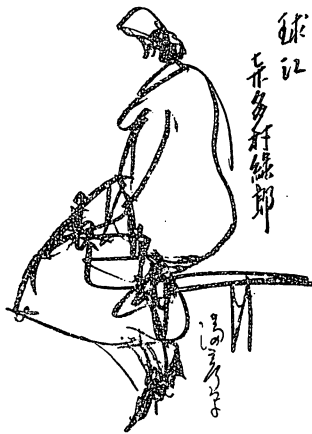
「新聞の小説を、芝居に仕組むといふ事は、頭から無理な事だ。よしや其の小説が、芝居が、つてゐるとしても、それを芝居にして見ると、單に小説の筋を動いてゐる上ツ面なものに過ぎぬのだ。」

これは、今日なほ盛んに行はれる新聞又は雑誌連載の脚色上演、又は映畫利用に十分いひ得られると思ふ。映畫はまだ豊富に人員と空間とを使用する事が出来るが、芝居ではさうは行かない。それでてとにかく脚本としては最初存在しなかつた讀物だつた原作を或る程度まで——臭が出てゐれば十分だが、讀者の再現慾を多少とも満足させ得れば——立體的に表現すれば成功の方であるが、がそれは限られたる空間と人間と、時間とに於て、全局を壓搾するのであるから、誠に悪くいへば一種の投機、僥倖を待ち設ける心持が、當事者の方にありはしないか。が、かうした困難な、脚色者も役者も什難い事が、未だに續き、即ちうぶ脚本から生れた芝居と同時に、小説の脚色に依る芝居が未だに行はれるのは、春葉氏の言葉も眞理、私の非難も百も承知であらうが、それが未だに行はれるのは、やはり「單に小説の筋を動いてゐる上ツ面なものに過ぎないのであつ

ても、嘗て新聞又は雑誌で讀み馴れた讀者の「幻」を描きたい心に投ずるのが第一であり、その旨目的な評判喝采によつて、更に湧く大衆の喝采を求めんとする、惡くいへば狡猾さに來てをりはしないか（善くいへば、藝術の如何よりも、興行價値の上乗に、より多く眼目を置いたもの）それに原作登載紙であつたその新聞又は雑誌の應援も、力あるものであらう。とにかく有力なる新聞、雑誌に載つたものでなければ、利用せられぬやうだ。其有力の意味は、大衆的に多く知られてゐるの意味である。春葉氏又曰く、「もとより其處には小説の性質もあるし、脚色者の手腕もあらうし、俳優の技倆もあらうが、要するに何う考へても、無理なものである。今日のやうな脚本の供給の豊富な時代に、何を苦しんでこんな手数をやるのだらう。

在來の名高い脚色劇、又これから先の他の脚色物は別だが、自分の物に限つては、たゞ小説の通俗的な點が、通俗的の芝居に適するだらうといふので、引出されただけなのだ。「生さぬ仲」だつて、……芝居としては通俗以外に何の價値もない」といつてゐられる。これには多少の謙讓もある。割引して聽かねばならぬ。が、大正二年に於いて既に、しかも原作者としての此の言がある。大正二年より二十年以上も経た今日に於いては、一層に脚本も豊富な筈である。それに相變らずこの脚色劇が行はれるのは、やはり大衆に歡迎せられた作は、それがたとひ新聞小説たりとも、一種の永久性があるのではなからうか

舊道徳新道徳の埒を飛び超えた、日本の永久性道徳、それを思慕する民衆の、善なる心に投ずるのではあるまいか。春葉氏のいふ「通俗」は、此の永久性を多量に含むとも見られる。その點からは、殉教的な「愛」を基調とした婦女の典型たる「生さぬ仲」の如きが、いつまでも歡迎せらるべき筈である。眞砂子の、夫に對する愛、繼子に對する愛、それは凡て殉教的なものである。それにこの作では、両親の母と育ての母との、いづれが子供よりして牽引力強きやの問題にも、ある答案を出してゐる。さうして此の答案は、育児の經驗者からいへば、一種の眞理で、また日本の家庭生活——夫唱婦隨の——からいへば、この眞理が永久でなければ困る。こゝに此の「生さぬ仲」の如き芝居は、今日の成年者以上には、自分たちの家庭の有形無形の或る反映として、同じ所謂新派の寵兒たる「不如歸」や、「己が罪」や、「金色夜叉」などより以上に、實感に近いものを以て見られるのであらう。



その新釋である。その新釋の程度如何は、まだ自分の知らぬ所であるが、漠然と考へてみて、新釋の生れるのは、是あるかなと、その存在には同感が持てる。議論めいて来るが、その譯は、最初の脚色は、單に原作の筋を芝居の上に表現しただけで、原作にまだ即き過ぎてると思ふ。これは、當時の讀者が、まだ小説としての「生さぬ仲」より知らぬから、その小説を如何に芝居として纏めたか、又讀んで頭に描いた俊策、眞砂子、球江、日下部等が、俳優といふ讀者と同じ世界に呼吸する人間によつて、如何に如實に表現せられるか、そこに非常な興味があつた筈である。然るにその當時の「生さぬ仲」芝居としてののは、今日に於いては既に劇として古典である。ましてやその原作たる小説に於てをやで、今日、讀物としての「生さぬ仲」の記憶、またその再讀を自ら強ひる人も殆ど無いであらうそこにこの新釋の自由さと、且つその存在性がある。即ち新釋は、劇としての初めて比較的に自由に物されたもの、と謂ひうるからである。最初の劇は、半小説半劇たるに於て。勿論その以後、數回上演せられるたび、逐次小規模の斧正は入れられてゐる筈であるが、自分の見た芝居も、伊井河合の見たおほえであるから、大正六年二月の東京歌舞伎座の伊井河合一座の以後のものだつたかも知れない。(大正二年十月、新富座の新舊合同以後、大正三年六月、明治座で靜間の一、大正六年二月歌舞伎座で伊井河合の一座などと上演せられてゐる。)

此の意味から此の新釋こそ「生さぬ仲」の筋ではなく氣持を生かした芝居の最初かと思ふ。原作からは第三であるが、それだけ芝居としての獨立、勿論時代的解釋も多少そこに加へられてゐると思ふ。南北も默阿彌も或る意味からは、新釋作者であつた。それだけ大衆に知られた從來の名聲を利用するといふ事は、古今同一、輕卒には責められないと思ふ。

— 四月二十七日、夜 —

### 三百人様の

大宴會場完備!

餘興……大市乙女ダンス

— 毎夜公演 —

會席料理  
肉のすき  
**大市**

長堀橋

日簡ルビ  
支那料理  
高級酒場





# 何が新派劇を

## 復興させたか

倉田啓明

俄にこの頃、新派劇が全盛になつて、東京では、やゝもすれば歌舞伎が壓倒されさうだといふ評判を耳にする。

なるほど、さういへばひところ、新派劇は恭微凋落してふるはなかつた。將來日本の演劇は……と言つたやうな問題になると、誰でも彼でも「新派劇は既に衰滅して、もはや論するに足りない。」と、頭からけなしてかゝつたものだ。それが突如、眞に突如として、盛り返して來たといふのだから、世の中の事は容易に村度をゆるさな。

そこで、何が新派劇を復興させたか、といふ命題も、時にとつて必要であらう。即ち編輯子のお望みに任せて、この疑問を考へてみた。

私は過般、浪花座で久々で所謂新派の三巨頭の演じた、評判の「二筋道」の最初の篇を見物した、今度の中座でも、この續篇が上演されるさうだし、既に東京では五回も連續的に演じてゐる。それほどこの瀬戸英一氏の花柳巷談は、人氣を煽つたやうで

### 誌上舞臺

永田衡吉作

## 増上寺炎上 二幕

五月の中座



### 序幕 芝公園の往來

芝公園に近きある邸の塀際に辻車の俣夫が蹴込に腰をかけて居眠りをしてゐます。明治四十二年三月下旬の曇つた午後。やゝあつて大道ながしの桶屋安吉が、古桶を持つて其邸から出て來ますが、彼の姿や形は、凡て彼の貧しい暗い生活を語つて居るものゝ様です。安吉は俣夫と、苦しいお互の生活の話を始めてゐます。  
「俣屋ア、俣屋ア……」呼び聲がしますので、俣夫は急いで去ります。ト急に人の叫ぶ聲がして一人の少年——順大が、茶店の爺に追ひかけられて來ます。順大は茶店から煎餅の袋を掻つ拂つて來たのです。爺は順大を捉へて交番に引

この一作のために果して新派劇は復興したのか、ともおもはれるほどである。だが、それは恐らく皮相の見解であらう。要するに「二筋道」は、復興すべき機運に向つてゐた新派に、偶然投じた一石であらうと、私は考へる。然しこれが機縁となつて、擡頭の期を速進せしめたのなら、瀬戸英一の功績である。

けれども考へてみると、新派劇と稱しても、伊井、河合、喜多村三巨頭の一派もあれば、井上に水谷八重子が加入して、びか／＼光る一派もある。また花柳、梅島、小堀などの人々も控へてゐる。なか／＼多士濟々といふべきだ。そしてこれ等の人々が現今新派の第一線に活躍してゐるのはいふまでもない。

それにしても新派は果して全盛なのか。私し否といひたい。

なぜなら、新派の全盛は、既に三十年前に去つたのだ。それはまだ私の子供時代、日露戦争前後のことである。朝日座に川上晋次郎が立て籠つた頃、歌舞伎俳優が新派の眞似をして「不如歸」や「己ケ罪」を演じた頃、高田實、秋月桂太郎等がこの世にあつて、人氣を凌つてゐた頃が、即ち新派の全盛期ともいふべきである。

では、なぜ當時、そんなふうになつたのかと考へると、これには種々の事情もあるだらうけれど、一つは日露戦争の影響だつたと私は見てゐる。なぜ？ もと／＼新派は壯士芝居から出たもの、時局物、戦争芝居は彼等のもつて得意とするところだ。歌舞伎ではその眞似は到底能きない。まして當時は今日のやうに映畫の擡頭しない時代である。勇武壯烈なる戦争劇を、舞臺に眺めて、國民すべてが敵愾心をそつたらう。

この風雲に乗じて、新派は興隆し極盛時代を現出したのだ。むろんこれ以外に、策謀家川音の智慧や、高田等諸優の藝の力も、寄與したであらうけど。

ばつて行こうとしますが、昨日の晝から何も食べてゐないと云ふのを聞いた安吉には、どうしても順太を爺の手にまかせせる事は出来ないのです。彼は爺に頼んだり、感したりして漸く順太を救ひますが、順太の口から物語られる一言一句は、皆涙の結晶です。順太は、父に追はれた母を求めて遙々北海道から出て来たのですが、都會に糞食ふ所謂ボン引にかゝり、土工に賣られたのです。然し、母戀しの一心から其處を脱け出したものゝ空腹は遂に少年をして、心にもない悪事を働かせて了つたのです。彼安吉は「よしッ」トばかり、麻布にゐるといふ順太の母を必ず探して見せるといひます。

## 二幕目 濱松町飯屋

裏通りにある、居酒屋を兼ねた飯屋です。前場から四五日後の四月一日の事。一トしきり花見歸りらしい職工達で賑ひますが、纏でそれらも立去ります。ト、安吉が姿を見せて順太が来て居ないかと尋ねます。安吉は彼れ以來順太を引きとつて世話をすると共に、一心になつて順太の母を探し廻つてゐたのですが、今日漸く其の居所が分つたのです。安吉は寸時も早く順太を喜ばせ様と歸つて来たのですが、姿が見えないので探しに出た所なのです。飯屋の女房おと

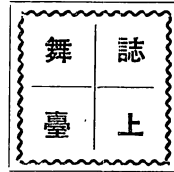
元來、新派劇は一種の寫實主義の藝風だ。最初は粗笨に、後には巧緻を極めても、依然として寫實が信條である。かの全盛期の新派の人々の藝は、まだ粗笨な寫實主義だったが、年が経つにしたがつて、今日三巨頭に見る如き巧緻洗練の技巧を生み出した。即ち、新派の人々には、新劇俳優とちがつて、立派な藝——独自の技巧の領域をもつてゐる。

ところが、この修練された舞臺上の技術が、後に災の種になつて、久しく新派は浮沈の境にさまよつてゐた。つまり世の中から飽きられた形だつた。只なるほどあの人々は巧いには巧いが、やる事が千篇一律だ。まつたく同じやうな脚本を、いつもく反覆されては見物もいやになる。退屈だ、それより歌舞伎の方がやはり面白いとなつて、次第に下り阪に向つた。

然し、近頃の新派は狂言の並べ方も變化があり、一本立の脚本なんか上演せずに、テンポの早い多少とも現代人の胸にアツピールするやうなものを選んで來た。これは新派のもつ独自の世界で、歌舞伎の方では、昔の脚本を改竄することは容易でない新派は平然として「新釋何々」をやる事が能きる。そんなわけで、急に新派は昔の勢を盛りかへして來たことは、事實であらう。

けれども、それがいつまでつづくか——これが問題だ。三巨頭はやはり新派のクラシック以外から出ることは困難だし、又それが身上である。若手は女優を交へて、純粹の現代劇に努力する。これも當然である。そして結果は「時」が清算するのを待つより外はない。唯、目下の勢を長く持續させようとするには、優れた女優を一人でも多く養成するのが肝要であらう。

よも安吉の俠氣には感激の涙をそゝられます。然し、世間には鬼の様な人間が居ります。安吉の泊つてゐる木賃宿の主婦もそれです。彼女は安吉が二三日宿賃を入れないからと、安吉をきびしく責め立てます。順太が宿に居ないのも主婦に追ひ立てられたからなのです。ト、「火事だ、火事だ……」の叫びと共に牛鐘が鳴り出します。芝の増上寺が焼けてゐるのです。折柄眞蒼になつた順太が、おびえたやうに駆けこみ、居合せた此家の娘お雪に縋りつきます。ト安吉が再び姿を見せ、順太を見るなり母の居所の分つた事を告げますが、どうしたのか順太はたゞぼんやりして居るだけです。それも道理、今宵の増上寺の炎こそ、順太のなせる業なのです。ト、云つても、決して順太が放火したのではありません。せめて一食なりとも安吉の負擔を軽くさせやうと、木賃宿を出て増上寺の樓の下にもぐり込んだ順太が、寒さしのにぎに焚火をしたのが、それが斯うした大事を引き起したのです。安吉の苦心も凡て水泡に歸して了ひました。順太は「お母さんに逢ひたいよ」と繰返しながら警察へと引かれて行きます。安吉は、喪心したやうに、ぼんやり立ちつくします。



柳川春葉原作  
川村花菱脚色並舞臺監督  
(五月の角座)

# 新釋 生さぬ仲五幕

「生さぬ仲」は柳川春葉先生の作で、これまで版々脚色上演されて参りましたが、此度のものは、新に川村花菱氏が、新解釋のもとに五幕九場に脚色されたもので、涙なくしては觀られぬ悲劇中の悲劇でございます。

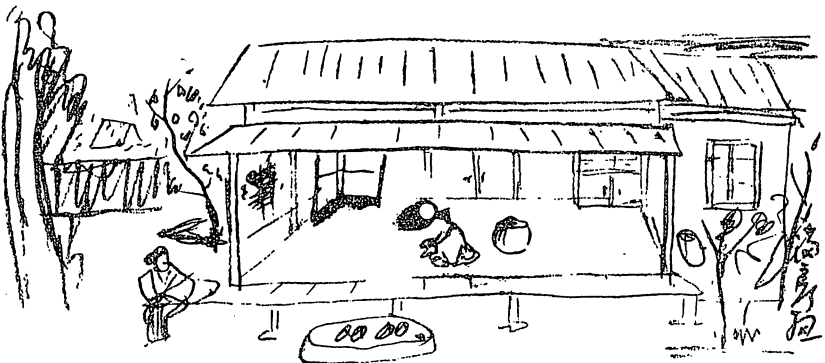
若草の芽 郊外にある赤澤亮輔方の垣外です。通りがりの小學生が、庭の花を折りつつ行かうとしたので、赤澤は娘の眞砂子とやさしくそれをさとして歸した後、何か戯談口を聞いて居りますと、多勢の小學生が一人の子供をからかいながら逃て來ます。からかはれた子供は泣き乍ら追つて來て皆と此處で喧嘩を始めますが、それは渥美滋と云つて眞砂子も只見知りの子供で、或る製藥會社を経営してゐる渥美俊策と云ふ人の子供なのです。母はなく、父は事業に没頭してゐる家庭

の暖かさといふものを味はつた事がないので妙にひねくれた性格になつてゐて、實は今日退學を命ぜられたのです、眞砂子は何とかして素直な人間にしてやりたいと云ふ心から、親に代つてもう一度學校へ滋を連れて行つてやる事にします。

子を持つ處女 滋を伴つて滋の受持ちの訓導を訪れた眞砂子は、訓導から滋と云ふ少年は、他の子供と全然考へ方がちがつてゐて、正しい事、當り前の事に妙に反感を持つてゐると云ふ事を聞かされますが、其の總てが母親がなく家庭の樂しみと云ふ事を知らないからだと思ふと、心からいぢらしさがこみ上げて來るのでした。其處へ學校からの知らせで父なる俊策も姿を見せ、自分が後添をも持たず、これだけ盡してやつてゐるのに、どうして自分の心が分らないのかと嚴しく滋を怒り

ますが、滋はたいへん「僕、お母さんさへ居れば……」と答へて、眞砂子を母にして呉れと云ひますので、一同は思はず押しだまります。善良な父 滋を眞人間にしたい一心から眞砂子は俊策の妻となり、其關係で赤澤亮輔も俊策の會社に勤める事になりましたが、今や會社は經濟的危期に直面してゐるのです。俊策は日夜此の難關を切り脱けるべく狂奔して居りますが、更に光明は認められないのです。支配人の唐澤は、頼と此際東洋製藥から資金をおぼぐのが上策だと進めますが、獨立では迄に仕上げた會社を、俊策として今更反對會社に乗り取られるが如き事は、死んでも出来ない事なので、斷然是を拒絶して更に奔走をする事にします。然して何か爲にする處のあるらしい唐澤は、藤村共々赤澤を説いて、會社を救ふは唯此方法あるのみと云ひますので世間の腹黒きを知らぬ赤澤は、渥美を救ひ度い一心から二人の言葉通りに、渥美には無斷で決行する事にします。

眞砂子 眞砂子を母としてから滋は見違へるやうな善良な少年になつたと共に、彼女をまたなきものと慕つて居ります。今も樂し氣に



晝の食事を済ませていそくと學校へ出かけて行きますが、彼女の存在を快く思つてゐないのは俊策の母岸代で、何かと眞砂子に辛く當るのでしたが、眞砂子は激愛しさにちつと堪えてゐるのでした。折も折、眞砂子を悲しみの淵に引き入れる魔の手が二重三重と襲つて來ます。それは俊策の先妻球江——且て涙美家の貧しかりし頃、貧をいとうて俊策や滋を捨て、さる金持ちの外人の妾となつて、アメリカに走つた女——が亡夫の莫大な遺産を抱いて歸り、現在の俊策の苦境を救ふ代りに、再び涙美家に歸り度いと岸代の弟恭野を通じて、岸代まで云ひ寄つて來た事と、赤澤の俊策を救はんが爲にした事が、其結果に於て、全然俊策を奈落の底につき落してしまつた様な状態になつた事です。俊策は俺を滅したのも、事業を滅したのも、赤澤であるとも男泣きに泣きます。是を見て赤澤は、如何に自分俊策の爲に善なれとした事で、今更俊策に詫言も言葉もなく、滋に唯一眼と泣き入る眞砂子を伴つて、涙ながらに此家を後にする事になります。其後に、級長になつた嬉しさを、母と共に分たんと、勢ひこんで歸

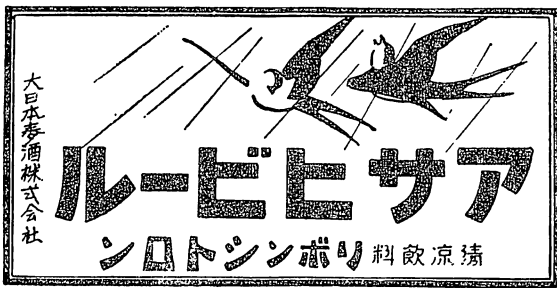
つて來た滋少年の失望悲しみは……。  
 闇にさまよふ眞砂子は滋へと、真心こめて纏つた肌膚を持つて、一日訓導を其下宿に訪れましたが、意外にも其處で滋の行方不明の事、又、俊策はそれを一圖に眞砂子が隠したものと思ひ込んで、眞砂子を怨んで居る事を聞かされました。彼女の驚き悲しみはどんなで有りませう。狂氣のやうになつて訓導に其行方を探して呉れと頼みます。訓導も此上は唯神のお力に頼る他はと答へるのでした。  
**おみくじ** 小雨降る夜半、とあるお社で訓導と眞砂子が偶然落ち會ひました。共に滋の身の上を案じて、神のおみくじを引きに來たのです。然して訓導のそれは凶、眞砂子のは吉と有りました。折柄又人影がしましたが、それは俊策其人でありました。訓導は「やつぱり信心より仕方がないのだ」と思はずもつぷやきます。  
**黄金の籠** 豪奢なる球江の居間で、俊策と再び夫婦になる事を願つてやまぬ球江は巻野から、段々事情が自分に好轉して行くのを聞き乍ら、此家に人知れず止め置いてある滋を招き、何とかして其氣嫌を取り結ばうとしますが、ひたすら眞砂子を慕ふ滋は、更に球

江の言葉に聞かるとはせず、却て此處を逃れようとするので、滋に眞砂子の許へ歸してやるからと偽つて、俊策をおびき寄せ、手紙を無理にかゝせ、そのまゝ一室に閉じこめて了ひますが、滋は折柄忍び來つた訓導に救はれて此の家を逃出す事になります。

**かくれ家** 赤澤は俊策に對する自が罪を詫びるべく、諸國廻路の旅に上らんとして居ります。其處へ滋少年が訓導に助けられて逃れて來ます。赤澤は一度は、俊策に對して、今滋に會つては濟まない、會ひ度を見たさに泣き入る眞砂子を制しますが、訓導の「せめて今晚一夜は……」と云ふ解しい言葉に三人は思はずひしとはかり抱きあひます。

**俊策の家** 愈 俊策の事業も、亦彼自身も破滅の日が來ました。彼は賃金を貰えぬ職工等の前に、我が體を投げ出して彼等のなすがまゝに任せんと悲壯な決心をかためます。其處へ姿を見せたのは球江です。球江は自分に全財産を投げ出さして、潔美一家を救はして呉れ、そして又昔の如き隣まじい家庭を作らして呉れと頼みますが、俊策はどうして、且て自分や滋を捨て去つた球江に、今更救はれる心になれませう、斷然はねつけると共に、

滋の行方不明になつてゐる事を語ります。これには球江も思はず色を失ひますが、それも道理で、球江は我家を逃出した滋は此處に歸つてゐるものとのみ思ひ込んでゐたのです。球江の心には益々潔美の急を救つて少しでも我が罪の償ひをせねばならぬといふ思ひが起ります。彼女は繰返して自分に此難關を任せと呉れと云ひますが、俊策は更に應ぜず、此時既に職工の一團は押し寄せて來て、あはや一大事は起らんとします。折柄眞砂子と滋が駆けつけ、職工の前に身を投げ出して、互に我れがと俊策に代つて、彼等の制裁を受けやうとします。此の美はしい心根は球江にどう響いたでせうか。是まで何事も、人の心も愛も、金の力で求め得られぬものはないと信じきつてゐた球江は、始めて我が心の卑しさと云ふものを悟ります。否、それは、只に球江ばかりではありません。怒り立つ職工等も思はず感激させられます。そして俊策の爲、一致協力事業挽回に努力する事を誓ひます。始めて夢さめた球江は、吹めて眞砂子に滋の身の上を頼み、後に残る心に鞭打つて立ち去ります。それを見送る俊策にも眞砂子にも眼には涙が露と光ります。



大日本麥酒株式會社

**ルービヒサア**

シロトジンボリ 料飲涼漬



# 桂子の場合

花柳奇子子郎

朝かてわだかまりなくて我儘で  
それで人情もろくつてくつたくな  
ない藝者……そんな恵まれた人間  
なんてこの世の中に幾人居るでせ  
う……私は何時も桂子をやりなが  
ら幸福そのものゝやうな桂子がう  
らやましくもなります。

少し位氣分の悪い時でも憂鬱な  
時でも一度この桂子に扮して舞臺  
へ出て来るとそんな氣持ちは消し  
飛んでしまひます。  
丁度それは歩き勞れた時の一杯  
のジンヂカイルを一口息に飲み干  
したあとの様に……  
去年の十一月初演以來四月迄五  
ヶ月の間演續して来た……愉快さ

つたらありません。  
私はこの役を受取るについて勿  
論二三のモデルを物色しました。  
それはあまりにも有名な幸運女性  
なので私がことごとくしくこゝで申  
述べませんでも私の演出を見てい  
ただけで分かることなのでこゝでの  
公開はさしひかえませう。  
二筋道の女性主要人物喜代子、  
おすが、共に先々月お目見得して  
居られますのに私丈がが東京で留  
守居の桂子の場合をやつて居りま  
したため此度が初のお見通りと  
なりました……「桂子の場合」を私  
は喜劇として扱ひたく思つて居り  
ます……こうした新世話劇の精練

こそ私共のもつとも手近な仕事で  
はなからうかと存じます。明るく  
素直な中に親思ひと云ふところに  
最も私はこの桂子に對して好意が  
もてるのです。  
新派も永年の下積み生活からや  
や悪まれかけて来て居りますが、  
今が一番肝腎な處だと思ひます。  
それには脚本の選定が一番重要な  
ことで二筋道のやうな芝居からこ  
うしたものゝ中から藝者と云ふも

のをとりのぞいた生活の芝居が出  
て来たら鬼に金棒だと思ひます。  
しかし、それはこれから先きのこ  
とで……餘談はさておきつまり二  
筋道のやうな狂言を……東京で詩  
験ずみのものをもう一度再試験を  
していただきますと存じます。  
明るくほがらかに五月の空に囀  
る雲雀のやうな桂子をどうぞ皆さ  
んで愉快に愛して舞臺の桂子と共  
にお笑ひの程を願上ます。



# 五月の役

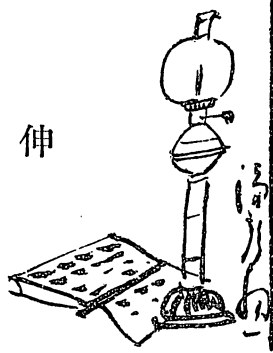
花柳奇子子郎

生きぬ仲の渾美俊策、二筋道の小  
林。今度の私の役は、両方共難か  
しい役だと思つて居ります。

たゞもう戦々兢兢々打ち、おのゝ  
いて、一生懸命に、演らせて頂く  
つもりで御座います。

# 『生さぬ仲』漫談

高谷 伸



たもので、最初に脚色上演されたのは、京都座の静間、福井一座で大正二年一月一日初日だつたと思ふ。つゞいて二月の浪花座に新舊合同で演ぜられ、當時の道頓堀に劃期的な人氣を占めたもので、七幕十場又は十一場の通し狂言であつた。主要役割を對照すると次のやうなものである。

役名 浪花座 京都座

新派が「生さぬ仲」を提げて、第二期黄金時代を現出したのは、大正二年の春で、その流行は各方面に及び所謂生さぬ仲時代として、食物にも「生さぬ仲井」まで現れた。これは親子井の鶏肉を牛肉に代えた洒落で、當今でも鶏が兎に代る生さぬ仲がインチキ食堂には、をりく現れる。演劇史的に言へば團菊没後、社會的に見れば日露戦後の歌舞伎の混亂時代に、不如歸、金色夜叉、琵琶歌、己が罪乳姉妹等を次々に上演して、歌舞伎の牙城を脅した新派が歌舞伎界の沈靜と、新劇第一次の運動とに、や、出鼻の鈍つた大正初期、この生さぬ仲によつて、再び劇壇を席捲し、つゞいて、渦巻や、かたおもひが評判になつた。

「生さぬ仲」は故柳川春葉の作、大阪毎日新聞に連載され

渥美 俊策	秋 月 熊
眞 砂 子	我 童 酒 井
清岡 球江	德 三 郎 井 上 春 之 輔
日下部 正也	村 田 正 雄 静 井 間
氏家 子爵	中 村 福 之 助 福 井
夫人 静子	木 村 操 村 田 式 部
卷野 大造	井 上 正 夫 都 井 築
赤澤 亮輔	松 十 郎 福

浪花座の合同劇は見なかつたが、當時の劇評によると、井上正夫の卷野が好評で、徳三郎(故六代目瑞寛)の球江が誇張の多い藝で不評だつた。京都座では静間の日下部と福井の赤澤が芝居をしてゐた。最近の大毎五十一年の回顧を見て察せられるやうに、當時すばらしい勢で發展してゐた大毎の宣傳力に援けられて、芝居の人氣も揚り、京阪から名古屋、神戸と評判になつて、第二期新派の代表作とな



つたが、この作の一つの意義は、新派の傑作には、東京から大阪へ傳へられたものが多いが、これは大阪を中心に東京へ進んだものであるといふことである。

内容は新派らしい義理人情、洋装上りの球江の子滋を中心に生さぬ仲の母の眞砂子、その夫の俊策の關係に、漁業會社の破綻を描き、荒尾讓介もどきの日下部正也を添えた大芝居で、前期新派の諸作に較べると、風俗などに多少の新味はあるが、思想はやはり歌舞伎めいた義理人情である。しかし、この義理人情こそ、紙真な最も「日本的なもの」と考へられるが、日本的なものは、却つて日本人に喜ばれず、大和魂のフアツシヨの新釋さへ現れる。

そこで新派も新釋大流行、曰く新釋不如歸、新釋已ケ罪等、等、等、だが、新釋多く新脚色程度で、歌舞伎もの、新釋程、思ひきつた庖丁は振はれてゐないのは時代の中間的關係が、原作に忠實か、とにかく新釋より新註的である。新釋といふ事は明治風俗を昭和風俗に翻譯するよりも、明治風俗はそのまゝに保存して、できるだけ思想を現代人向きに近づけた方がよい。そのために原作を離れる場合も亦止むを得ない。思想を新らしくといつて、交通宣傳のやうに左へくといふのではない。餘り左傾するのは反對だ。餘りな舊思想だけは剪除した方がよいといふのである。ところで風俗の方は、浪子の白い大きな肩掛、乳姉妹の

人力車のやうに特殊なものを中心に、見た目の滑稽にならね程度で庇髪をオールバックまで、進展させぬ方が調和が保ち得るかと思ふことは、新派が現代劇であるといふ觀念に對する根本的な新釋ではあるまいか。

「生さぬ仲」は、とにかく大正と聲のか、つた時代だけに滋の貧傷にも自動車が使はれてゐるし、漁業會社といふ事業も時代離れはしてゐないが、問題となるのは、ちつと泣かせる眞砂子の役より、敵役の球江の方に觀衆の心が動きはしないかといふ懸念である。金が敵でもあり信念でもある今の時節に於てである。

筆者は大正二年以後、大正八年に井上、花柳、木下、木村で、大正十二年に荒太郎山口富士野の新興劇でこの生さぬ仲を見た時そんな疑問を持つた。今度の新釋の餘地もこの邊にあるのではなからうか。

「生さぬ仲」の流行は、大朝の「渦卷」の流行となりつゝいて、「かたおもひ」となり、新聞長篇の脚色萬能時代となり歌舞伎系の俳優は、現代小説を時代化して、鬻物に翻譯する舊釋新聞小説まで出現した。

この舊釋も根本的に見れば、かへつて新釋である。新釋生さぬ仲に就て、何よりも考へさせられることは、大正初期の作品まで、新釋の二字を冠せねばならぬ程、時代の移り行く速度は早いといふことである。

# 三頭目に就いての思ひ出

森 ぼ の ぼ

## ◇ ホツソリしてゐた伊井

伊井君の舞臺を始めて見たのは、今に憶えてゐる處では、市村座の山口定雄一座に加入してゐた時だ。山口が二長町で旗擧げたのが、明治二十五年の七月だといふから、多分その頃か、日清戦争前後だつたのだらう。何ンでも、その時分流行つた探偵物じみたシバキで、本田小一郎といふ體のガツシリした、押出しの立派な役者が敵役の首魁。これが延命院もどきで、掛物を懸けた壁の穴からヌツと出て、泣崩れてゐる女の後へ立つ處などがあつた。その誘拐された主役の女が座頭の山口、この優は舊派出の女形だつたといふことで、宙乗りや、電氣應用の八重垣姫の狐火で賣出した。當時も伊井君は二枚目どこで、縞物の着付だつたから、俠客肌の仕事師（鳶の

者）か何かだつたのだらう。スツキリ水際立つてゐた。

同君が抑々役者になつたのが二十一ださうだから、その頃はまだ舞臺の人としては二三年しか経つてゐない勘定だ。中年から肥滿して來たが、その頃は所謂捨すずで如電翁かど「好い容貌」を伊井琴峰ともぢつたに違はずどう見ても江戸ッ兒らしい、引緊つた男振りだつた。役柄も、女を救けて悪人ばらを懲らすといふ儲け役で、大詰にはハラ／＼するやうな立廻りがあつたから見物に受けたに違ひない。

その後伊井一座となつて三十年代には、市村座、宮戸座、眞砂座等で活躍したが、自分として忘れ難いのは所謂中津のコヤ（眞砂座）で河合武雄君と握手して上演した近松物の「國姓爺」や「堀川波鼓」「壽門松」等の燃えるやうな熱心さを持つた研究的なシバキだつた。

## ◇ 河合の立役

河合君を見たのは、前に述べた中津の近松研究の時か



らかと思ふ。この優もその頃は今のやうにデブ／＼して  
るなかつたから、今より一層妖艶だつた。そして、その  
妖艶さが役立つ「波賊」のお種、ガサツな中に情の  
ある「芝浦草財布」の魚屋の女房なども忘れられないが  
スツカリ魅せられてしまつたのは「娘節用」（小三金五  
郎）の小三だつた。

本郷座時代のソ、リに高田實の光秀で、この優の十次  
郎、伊井の長兵衛で權八等を見た。流石に名老優、大谷  
馬十の子だけに演ることもソツがなかつたが、兎に角、  
美貌に參つてしまつた。今でも濃艶さを少しも失はない  
のには全く驚く。

喜多村君に樂屋でシミム／＼話し合つたのは、大正三年  
頃の中座だつたと思ふ。その頃は今の花柳君がまだ書生



さんで、一さんの顔を拵へてゐた。法善寺のみどりや、  
住吉の丸太格子を教へて貰つたのもその時だし、南の菱  
富で眞山氏等と一緒に飲んだのもその時だつた。シバキ  
はたしか「小雪」で、姉妹が男に間違へられるやうな處  
があつたかと思ふ。何んでも、姉妹の着付を對にした方  
が可からうといふやうな駄目を自分が出したが、作者の  
眞山氏は採用しないでしまつた。眞山氏も、喜多村君も  
其頃よく飲んだ。眞山氏は他人に注がせず、手酌でガイ  
／＼あほつた。自分はとう／＼其夜、喜多村君と同じ笠  
屋町の旅館へ泊ることになつた。自分も其處でタワイ、  
タワイだつたが、喜多村君にも一場のローマンズがあつ  
たことを後に聞いた。それはマア伏せて置かう。思へば  
もう聴て二タ昔になる。自分にとつては誠に懐かしい極  
みである。

（上）伊井兼峰 中、喜多村銀郎 下、河合武雄

# 新派今昔話

西尾福三郎

「近頃の新派が當て續けに當てゝゐる現象を君は何う考へるかね」

「その原因は色々あつて一口には答へられないが、第一には新派以外の諸劇團の行き詰りが、反動的に新派を潤はしたものだと思ふ」

「外の劇團が行き詰つて來れば、自然新派だつて行き詰るのが當前な筈なのに、何故新派に限つて行き詰らないと君は云ふのだね」

「新派は飽く迄アツツウデートな劇團だからとさ、舊劇のやうに過去を立場にしたり、新劇のやうに將來を標準にしたりしないで、その日々を目標にしてゐれば行き詰りはない譯さ。それが新派の特色だからね」

「その日暮しが新派の特色だと云へばそれは新派を侮辱したやうに聞こへるが……」

「何う解釋しやうとそれは君の自由だ僕はたゞ創立以來四十餘年間、新聞小説や時事問題の舞臺化を生命としてき

た新派の特色を一言で評したらさう云へると思ふ。現に半世紀に近い歴史を持ち乍らも、特に新派独自の脚本と云ふ物を持たず、不如歸、金色夜叉、己が罪、生さぬ仲、月魄、琵琶歌、乳姉妹、つや物語、湯島詣、酒中日記、等々々これら新派の當り藝が殆んど全部と云つてもよい程脚色物詰りで、書き卸しの脚本が一つもないと云ふ點が何より雄辯にその日暮し劇團である事を證明してゐるぢやないか。これは決して新派の不名譽ではない。謂はゞ特色さ、強味であると同時に弱味であるかも知れないが、要するに必然のそれが性格なんだ。」

「その日暮しが性格ならルンペンの親類筋かね」

「これさ口の悪るい。ルンペンと云へば今日の興行物は何れもこれも目的と云ふ物を失つた無根遠のルンペンの存在ぢやないか。時代そのものがルンペン時代なんだからね」

「次に新派繁昌の第二の原因は？」  
「さう開き直つて訊ねられると一寸返答に困るが、ともかく戦争と新派——これが又妙に深い關係があつてね。」  
「と云ふ……と」  
「戦争の後には必ず新派の芝居が繁昌してゐるから不思議さ」  
「それは單に新派に限らず、戦勝景氣の餘波を蒙つて凡ゆる興行物は繁昌したらうぞ」  
「では今度の事變後、外の芝居が赤字續きで腐つてゐる際、獨り新派だけが斷然受けてゐる現象も矢張り戦勝景氣とやらかね」  
「必ずしもさうぢやなからう。こゝいらに新派がアツツウデートの劇團としての價值があるのだ。單に軍事劇で前受けを狙ふと云ふだけの意味からではなく、今日と云ふ物を特に強く意識させられる時節には、矢張り今日を取扱つた芝居が尤も好評を得ると云ふ事になるのだらう」

「今日の芝居と君は云ふけれ共、近頃新派の芝居は大部分昨日の芝居ぢやないか。今日の芝居ならブロ劇團の演し物の方が餘つ程アツツウデートだせ」  
「昨日の芝居でも何でも一應今日の意識でもつて再整理をやつてゐる所に注意すべしだ。所謂新釋と云ふやり方だこの融通無碍なところが又新派の一つの特色かも知れぬ。尤も君の云ふやうにブロ劇壇の演し物の方が遙かに今日の芝居に向いてゐるかも知れないが、芝居と云ふものはイデオロギイを見る物ではなく藝を味はうものだからね。新派繁昌の第三の原因はこの藝のうまさ人が惹きつけるのかも知れないね」  
「併し藝のうまさには於ては歌舞伎役者の方が……」  
「無論全體的には歌舞伎役者の藝はうまいに違ひない。併し今も云ふ通り單に藝のうまさだけでは人が呼べない御時勢になつてゐるんだ。そこで藝と脚

本と役者の顔と、この三拍子を尤も手近い所で取揃へた新派が……」  
「おつと待つた。料金の安いと云ふ事を君は抜かしてゐる。近頃の僕等にはそれが一等結構な條件だ」  
「モチ、所でその藝のうまさも、所謂今日の三頭目たる河合、喜多村、伊井三氏を境目として少しづつ、變つてきたこれは新派の將來にとつて大いに喜ぶべき事だ」  
「何んな風に變つてきたかね」  
「今日迄の新派は、名は新派でも、その技巧は舊派と大した變りはなかつた大谷馬十の血を引いた河合、紙治や權八のうまい喜多村、その他歌舞伎界から轉身した俳優を多く抱合してゐる今日迄の新派の藝は、歌舞伎の藝のうまさと大した變りはなかつた。それが花柳、藤村、梅島、柳氏等が新進新派と云ふものを組織し、又、小山内、久保田兩氏中心の下に新劇座を構成したりして、従來の技巧とは行き方を異にし

た所を見受けるやうになつた。爾來、女優を入れ、新劇俳優を加へそれに映畫技巧の影響もあつたりして、今ではこれ等若手の藝が、前記三頭目の藝と即かず離れずの形を持し乍らも、その實充分な新境地を持つてゐる事が分る前云ふ通り只管今日に追隨して行く事が新派の生きる道なのだから、幾らうまくつても、もうこれからは舊劇風な巧絶一天張りの技巧だけでは見物は承知しないだらう。この點で僕は今後の新派若手俳優諸君に期待してゐるのだ折角こんな黄金時代を迎へたのだからこの際老大家は第一線を若手に譲つて徐ろに新派百年の大計を企圖して貰ひたいものだ。」

「讚成だね。現に新國劇が若手を活用するやうになつてからうんと人氣を取返へした例もあるからね」

「その點では同じ新派でも遠に井上は三頭目とは又別種の立場にあるだけに絶へず新しい氣運に乗じる事を忘れない

かつたのは僥とすべきだ。新派とは違つた藝術座一派の技巧を消化すると共に、逸早く女優の養成に目をつけ、一歩でも現代に遅れまいとして氣をあせつてゐる有様は寧ろ痛ましい位だ。現在我國の新派が伊井、喜多村、河合一派と、井上一派とに分立してゐる事もお互に刺戟となつて、却つてよい結果を齎す譯になるから、これは精々對立抗争させるに限る」

「すると今後新派の進むべき方向として、新技巧の獲得、若手の拔擢、女優の活用と云つたやうな所に落ちつくらしいが、それなら敢て貴説を待つ迄もなく、何れも現在の新派劇團が着々實行してゐる點ぢやないか」

「肝要な物が一つ落ちてゐる。新派の爲の創作脚本を求めぬ事だ。今迄の世間は新派と云へばすぐその後へ悲劇と云ふ文字を連想した。事程左様に新派の芝居は手を代へ品を換へて、單なる

お涙頂戴に終始してゐた。この期會に願はくばさうした既成概念を打破してしまひたい」

「ではどんな物を演ればよいのだ」

「それは僕にも分らない。これから生まれてくるものなんだからね。それに對して註文せよならしてもいいが……要するに常套的なお涙芝居ではないものもつとスリルがあつてもよし、エロであつても構はぬ、悲劇でも喜劇でもとにかく新しい刺戟と昂奮を感じさせるものでなくてはならない」

「すると、實話劇、花柳劇、家庭劇とこう並べた今度の膳立て等は如何だね果してお氣に……？」

「召すも召さぬも大方のお客様次第僕のはたゞの理想論……」

「へん……道理で……」

「今昔話と書いたが、實は未來話かも知れぬて」

「蒞蕩話ではないので……？」



# 大當り『二筋道』

—(五月中座の中幕)—

小山紅露

引き絞つた覗ひところが首尾よく圖に當り、江戸から浪花へ二筋道の大評判は客も座方も續々と恐悦者なり。

春深し三筋四すじに人の綾

緒、お互ひの氣持の上から濱町公園の背園を名残りに右と左に厭かぬ別れをした阿久津と喜代次。良人と愛兄たちの爲めに二度の引眉毛、二すじ三筋に氣をつかふおすが、斯うした中に羨ましい程呑氣な桂子は？

世の中を派手に大きく牡丹かな

藝妓屋とは思はれない程豪華な部屋、それが桂子の家である、母親と女中を相手に時偶旦那の鈴村が来る。鈴村は所謂旦那として申分のない好人物なり。

風鈴や女に惚れてゐれば無事

桂子が唯一つの不満は旦那の鈴村が母親を毛嫌ひして居る事、併し桂子の母は在來の藝妓屋のお袋型とは違ひ上品な未亡人といふ人柄なのに……………。

蚊やり火や只何となく烟つたい

義理ばかりでなく桂子は旦那を嫌ひな

のではない。……だが。

葉櫻や昔の人にめぐり逢ふ

久方振りに會つた最初の愛人に幻滅を感じた桂子の心は再び旦那鈴村の懐ろへ……………。

親切が胸にこたへて明易し

阿久津と別れてからの喜代子は心の淋しさを僅かに茶湯活花などに紛らせてゐる。

行春や只何となく物足りぬ

尾久から霞町へ——藝妓家業の悲しさは心にもない夜泊りも月に二三度、家庭の砂紆はそれから生じて来る。

思ふ事初夏にある惱ましき

が、潔白なおすがの心情は友達喜代子の扱ひで良人將吉の疑念を解いた。

曉のこの家晴れし職りかな

# 新派劇

## 大衆小説の轉身期

入江來布



新派劇は、その歴史から見て、長篇小説（新聞小説と謂つてよいかも知れぬ）との關係が密接である、例へば、極く大ざつぱに言へば「金色夜叉」とか「不知歸」とか「己ヶ罪」とか、また今度新解釋で上演してゐる「生さぬ仲」とかの全盛期がその關係の最も密接に結ばれた時代であつて、また同時に新派劇の中心時代であつた、それから後に新劇運動が擡頭したり其他の刺戟や影響で新派劇にも翻案ものや、新文學的のものにも移つたが、それだけ大衆小説との關係が薄くなつた、新派劇の方から大衆小説との契合を疎遠にしたのみでなく、大衆小説の方でも漸次に傾向が遷り變つて行つた。新派劇の形勢も一變して

了つた。  
現在の新派劇は奮闘時代である。元老も、中堅も、新進も、

一生懸命その占據地を固守し、更に何か新境地を獲得し、新しい自由國の建設を夢みてゐるやうだ、兎も角も奮闘の酬いは確かに手答へがあつて、今日不振の劇界に處して相當の盛況を持續してゐる、優人にも伊井君あり、喜多村君あり、河合君あり、中座の五月は三巨頭の顔合せで大に氣を吐いてゐる、その人氣や私たちの年少の頃の成美團は少し話すが古る過ぎるが、兎も角もその壯者時代と大きな異りがない程である、それはまことに結構であるが、然らば今日の奮闘をさへ續けて居ればよいであらうか、こゝに一たび「次の時代」へ思ひをうつすと、不安の兆しが忽ち起る、新派劇はどうしたら宜しからう、どこへ行つたら宜しからう。

歴史的に謂へば、嘗てのやうに長篇小説、大衆小説との道づれへ戻るべきであらう、即ち「動く小説」の興趣を再現するのが最も傳統的な進路であらうが、こゝに困難なことにはその道づれに頼むべき先達の大家小説がモチーフ、技術をすつかり以前と變へて了つてゐる。嘗に以前と異つてゐるばかりでなく、先達そのものが既に流轉に迷つてゐる。新派劇諸君が「動く小説」を舞臺の上に活躍させるには先づ本文の小説に於て「讀む新派劇」を用意してゐてくれねばならぬ。ところが不幸にして



今日の大衆小説界と、新派劇との間はあまりにもかけ離れてしまつてゐる。今日の大衆小説は依然として幕末エログロ式の餘喘を保つてゐるやうであるが、これを其まゝ舞臺に移すことは新派劇の得策でなく、またピッタリと來ない、大に妖艶味を發揮して見たところで當年の河原市松の範疇を出でず、直ぐに行詰つてしまふ、のみならずそれは新派劇が「役の行者」や「名和長年」へ進出することも適所ではない、新派諸君には「國定忠治」にあらず「机龍之助」にあらず、而してまた「三勇士」にもあらざるところに特有の壇場がある、その壇場を先づ意識して、將來そこに如何なる活躍を期すべきかと運命の懸るところである。恰もそこに一道の黎明が認められる。

その黎明とは、即ち大衆小説の轉換期である、大衆小説が、幕末エログロに行詰つて、後に一轉換を畫し一轉身をなさんとしてゐる、この轉身期を巧みに把握して、その流れに合し、否むしろ積極的に、その流れを新派劇の特長とするところに誘ひ入れ、新大衆小説と新々派劇との關係を、恰も嘗ての新聞小説と新派劇との關係の如くに、もう一度覆水を盆に還すべきである、死灰さへも戀人に逢へば再燃する、況んや兩方とも死灰でなくて活灰たるをや、私はこゝに多大の期待と興味をもつて居る。

一見、行詰つたかに見える新派劇、それは却つて洋々たる前

途をもつてゐるのである。但し、それには元老諸君は姑く措いて言はず。若手諸君に於て徒らに焦慮して却つて運命を窮地に陥る、の愚をなさず、徐ろに大勢を觀じ、即ち大衆小説が次に、最も大膽に、さうして最も熱情的に勇往邁進すべきであるその日の勇ましき諸君の「鐵兜」の雄姿を我等は楽しんで待つてゐる。(四月末旅中にて)

### 「續一一筋道」

【おすがの家】

喜代子 それはお言葉が違ふやうに存じます。

將吉 何處が違います。

喜代子 おすが如さんは、貴方の疑ひを解いてくれと頼みにおいでなすつたんです、御自分の心では、貴方を死ぬまで待つ良人、その良人に疑はれては立つ瀬がないと、泣いて私へのお話でした。

將吉 それ程に思つてゐるも

將吉・梅島昇  
喜代子・喜多村綠郎

のが、何故幾晩も家を明けたのです。

喜代子 さあ、それが今も申す通り、藝妓をしてゐれば、時間にか歸らうとしても、お客様の不機嫌な様子を見れば、二時三時まで動めなければなりません、貴方がたは花柳界のことを御存じないからでせうが、飲む方は、時間を忘れて腰を落着けておしまひになります。



# 淡海劇の新轉換

桂田 曉香

劇の中へ、淡海節など云ふものを挿入して、唄つて聽かせ、兎に角、次から次、目先きをかへて、大衆にアツピールする事に努力して來た淡海君ではあつた。

時にはプロレタリアイデオロギーを、多分に盛つたものの上演した事もある。

又、芝居を新らしくするために、女形ではびつたり來ないと女優を採用した事もある。

私は或時某座の道具の方の人から、こんな不平をきいた事がある。

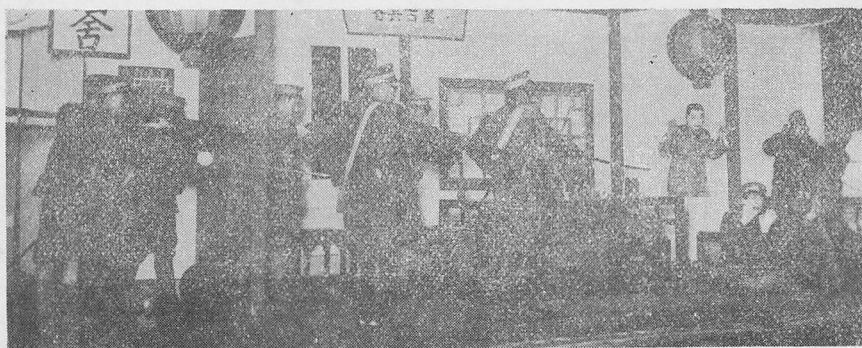
——淡海劇の道具が一等六ヶ敷い、他の芝居だと、時には間にあはせもので濟まされる道具でも、淡海劇ではそれが許され



ない、氣のすむやうなものでなければ、何べんでも駄目を出される、だから、決してまやかしかは出來ない。それだけに骨ですと。

◇ 私は之をきいて、成る程と思つた。

淡海君が今日あるを得たのも、之だな!! と其時思つた。人間は兎角邪魔くさくなると、「い、可滅でい、ぢやないか」



面臺舞「士勇三彈珍！呀」

と云ひたくなる。

ところが淡海君は、それを云はない。

何處迄も突込んで行く其處に彼の偉いところがある。

それが、彼の今日をあらしめたのだ。

◇

曾て、關東大震災の折關西に移り住んだ三宅周太郎氏が、關東へ引上げるにのぞんで、關西でのめつけものが二つあつたそれは、阪東壽三郎と、志賀廻家淡海の存在である。事を何かに書いて居たのを記憶する。

ところが、その淡海君が、最近どうもあまり振はなかつた。

私もフアンの獨りで、

よく觀に出掛けたが、どうもあまり香ばしい成績ではなく、何時も歸りには失望した。

露骨に云へば、實にくだらない、ひとところとして、取柄のないものを上演して居る事すらあつた。

昨年の春から秋にかけて、私は遂に淡海劇を見捨てやうとさへした。

それ程にまづかつた。

その主因をなすものは、云ふ迄も無く、よき脚本の無い事、一座に統制がとれて居ない事だつた。

私は數回、好意ある苦言を呈した。

そして最近になつて、白井社長が、東京で素破らしい當りを取つた、大町龍文氏作のナンセンス劇、「呀、珍彈三勇士」の脚本を持ち歸られて、之を淡海君にあてがはれ、演出者として、野淵昶氏があたる事をきいて、私は内心喜こんだ。

愈よ淡海劇の方向轉換期が來たと——  
船には水先案内が必要である。軌道の上を走つて居る電車で

さへハンドルがなければ、すぐ脱線してしまふ。

ところが、今迄の淡海劇にはそれが無かつた。

いやあつたにしても、活動寫眞の方で云ふ所謂、自作自演、自監督だつた。

活動寫眞の例をひくが、今迄これで成功した寫眞が、一本だつて無い。

人間の能力には限りがある。餅は餅屋だ。映画でも演劇でも、総合的な藝術である。

役者一人居たつて、芝居は出来るものではない。監督だけが居たつて、芝居が出来るものではない。

ところが、今迄の淡海劇には、その重要な要素の一つが缺けてゐた憾みがあつた。

それが、芝居の上に「物足らなさ」として現はれて居た。私が、淡海劇を見捨てやうとする原因ともなつた。

ところが、淡海君はどう考へたのか、演出者を拒否しやうとした。

實にけしからん事だ——と私は思つた。然し物分りのいい、淡海君ではあつた。

自分が間違つたと感じた時、何時でも折れて出る、いや他人の言を取入れる淡海君ではあつた。

私は蓋開けを期待した。そして見た。

呀！ 珍彈三勇士は、今迄の淡海君の世界とは、全然異つたものである。

淡海節も出て来なければ、世相教訓も無い。

そのかはり、新しいギャングと、徹頭徹尾ナンセンスで、

観客にアツピールする淡海君にとつては打つてつけの脚本なのである。

九景から成るレビニュー式な、スピードのあるもので、世を騒がした肉弾三勇士からヒントを得、チャイナリズムの波に乗つて、支那の時局を諷刺し、折角悲壯な決心で爆破に行つた聖壇が、味方のそれであつたりして、今に恩賞にありつけると思つたものが、銃殺されたりする、支那魂をナンセンス化したものなかく、氣のきいた描き方をした脚本である。

### 倍て演出

かう云ふ作品は、澤山の兵士などを使用する作品は、よほどよき演出者がつかなければ、芝居が龜戸事件のやうに、バラバラ八ツ切りになつてしまふ。

失敗しやすいのである。

こゝで少し演出者野淵氏の提灯を持たさして貰ふが、氏は樂地なんかよりすつと以前、十數年前、京都で、小劇場運動を起し、その後、何百と云ふ戯曲の演出をやつて来た人である。

そして氏の門から、劇壇の重要な地位に居る人も排出して居る。

だから、演出者として、申分なき氏ではあるのだ。

その野淵氏の演出である。

吾々の興味は、この演出の上にかゝつて居た。



鶴龜・長隊小 慶辨・平茶安 海淡・々開西 太樂・々要不

野淵氏が、淡海君と組んで、どんな演出をするか、既にさつきも云つたやうに、脚本が、絶對的に、演出者にたよらなければならぬやうに出来てゐる。  
い、可滅に胡魔化せない脚本である。  
野淵氏は、之に様式化された、リズムミカルな演出を試みやうとした。

背景なんかも漫畫風に、人物なんかも漫畫の中の人物にしやうとした。  
その意圖は分る。賛成!!  
そして、澤山の兵士をなかく、有効に動かして居る。但し俳優

諸君が、馴れないためか、今迄のものとは畑ちがひのものだけに、大分まごついた人もあるにはあつたが、これは自然手がける内、統制が取れて来るだらう。  
又スピード、リズムミカルなど、云ふことについても、云ひたし事はあつたが、それは又の機會にゆすらふ。

◇

で演技にうつる。  
淡海君 從來の淡海型から、抜けてゐる事をよしとする。  
志賀 廻家淡海ではなくて、三勇士の一兵卒西開々になり切つてゐる。  
俳優はすべて、芝居をして居る時は、俳優であつてはならないのだ。  
たとへば、鷹治郎でも、延若にしても、忠兵衛をして居て、勤平をして居て、鷹治郎であつたり、延若であつたりしてはならない。  
その扮する人物になり切らなければ嘘である。  
その點、今度の淡海君は、成功と云へる。  
なかくユーモアも出して居た。  
それから——  
同じ三勇士の辨慶君も、樂太君も、決して履きちがへては居ない。  
人物の性格を呑み込んで、しぐさも丁寧である。

殊に樂太と云ふ人は、傍へ廻ると不思議な位、成功する人である。

龜鶴の小隊長、かもめの花艶麗などもよい。かうして、ひと通りよい出来である。

淡海君は、この劇を演ずる最初に、「これは喜劇だ、いやナンセンス劇だ、と云ふ事について、演出者の野淵氏と、意見の相違で、争つたさうである。

そして、決局野淵氏の意見を入れて、ナンセンス劇として、

### 守田勸彌

阪大病院に入院加療中の

阪大病院に入院加療中の病勸彌は本年一月東京歌舞伎座の「石切権原」「小猿七之助」に二役を受持つて出勤中、鼻頭が病的に肥大し初めたので舞臺を退き一意醫療につとめたが利きめ掛々しくないいで日ごろ信心する金光教の岡山の本部へ二月はじめから妻女おたまさんと一緒に起き参籠してゐたが、かくては將來舞臺への復帰も覺束ないと松竹白井會長、大谷社長を始め大阪帝大和田博士、金光教の同信の醫學士

彼は、從來とはちがつた畑を開拓した。云ひ換えるならば、之によつて、淡海君は、行詰りを打開し（此言葉に語弊があるならば）方向を轉換したのである。彼を見捨てやうとしたファンも、今度の新しい試みによつて、再び彼の許に歸つて來る事であらう。淡海君よ、しつかりやつて下さい。そして、よき演出者と、固く握手して、進んで下さい。私は、君のファンとして、特に之を云ひたいのである。

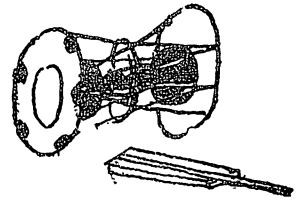
（四七頁『近世京阪作者考』の續き）

嵐徳三郎と共に江戸へ下り、二代目櫻田治助死後立作者となりしが、天保六年大阪へ歸りて、三世歌右衛門より龍玉の名をうけ改名す、天保八年正月に「けいせい玉手綱」の佳作あり天保王貞の春死す。當時は俳優中に作をよくなる者あり。自己の筋を作者に執筆せしめたり、又は役者自身脚色せる者もあり。並木五瓶の著「戲財録」に作意ある者として俳優名を記せるあり。

姉川新四郎、元祖市川團十郎、市山助五郎、元祖中山七三郎、松島兵太郎、藤川半三郎、市山卜平、辰岡久菊、中山來助、尾上新七等ありしとぞ。

萬歳の大阪

花廼家華水



萬歳は三河が元祖と謂はれ、高貴の御前に於ても演奏した記録があり、それを記念して「御前萬歳」と唱ふるのもできてるなど、渺からぬ歴史を有してゐる。

その萬歳が大阪へ持込まれたのは、門附の萬歳のほかに、鈴木源十郎といふ盲目の萬歳師が、今から三十年ばかりも昔に、名古屋からやつて来て寄席に現はれ「めくらの源十郎」で賣り出したのが、寄席の萬歳のそもぐの最初である——

これを河内や大和、乃至は江州あたりの音頭取の連中が、見習うて荐りと萬歳ぶつたものだ——その中に淡路の音頭取から身を投じて萬歳師となつたのが玉子家圓辰で、同人は何かと新機軸を試みて大いに勉強したうちにも、胡弓を入れて三曲萬歳を考案したのが好評を博した、これが即ち大阪の萬歳の元祖でしかも大師匠である、その門下からは菊春を出し、太郎を出し捨丸を出し、源丸を出し、芳丸を出したのである。

其頃萬歳の定席といへば、天満天神社の裏門に在る朝日席と松島の遊廓内に在る立花席と、僅に二軒だけが廣い大阪に於ける萬歳の定席であつた。

玉子家圓辰の人氣は當時大したもので、折柄の日露戦争をあ

て込んだ萬歳などは大評判となり、いつも寄席は満員の光景、この圓辰の給金は晝夜働いて六十錢——それが物價の安い時代であつたから、蓋し破天荒の取り高であつたのだ。

○  
處が今から十年程も以前に、安來節が大坂で盛んに流行し、果は出雲の國から、安來節のうまい素人の男女が續々入り込み寄席へ現はれたのが人氣を呼び、その専門の寄席も出来たがその寄席が始まりからお終ひまで安來節ばかりでもと、合間合間に萬歳を加へることにした。

この萬歳がまた大いに人氣を博し、小鼓と扇子を手に、萬歳やかぞへ唄をやる所謂圓辰の弟子達が巾を利かした、これが動機となつて、新派の役者の下廻りとか、劍舞士や、職人なんかの若い連中が、萬歳師の弟子入りして、小鼓も打たねば、新しい文句もしやべるといふ舊套を破つた萬歳が續々出現して、世上の評判ともなつた。

○  
そこで吉本興行部が逸早くこの新萬歳に眼をつけ、達者な腕利きを集めて、千日前の南海通に、娘義太夫の定席から落語の定席となつた南陽館を買収して萬歳の定席としてからは、いよゝますゝ萬歳の人氣は盛んとなり、隆昌を來したのである。

松竹でもこの大衆藝術に着目して、道頓堀の辨天座に、五座の櫓の格式を破つて萬歳大會を開き、續いては角座をも解放して競演大會を開場するに至り、今月はその幾回目かである——

○  
當時萬歳の人氣者、花形どころを擧げると、天満の鍛冶屋から飛び出して、旅廻りの新派俳優の群に投じたが、頭のくさできから座員に撥折されるのを憤慨し、旅先で脱走して千代丸の弟子となつたアチャコ、以前は今男と組んで喝采されてるが當今ではエンタツを對手として萬歳の向上を圖つてゐる、そのエンタツは尼崎の石田といふ醫師の息子、中學を半途で退き、新派の下廻りから先代芳春の門に入る、米國にも渡つたことあり、この男のとほけぶりつたらない。

○  
五郎は子供芝居から劍舞團に入り、新世界で評判だつた東家力太郎の一座にゐた、しのぶは京都の産、橋本周平といふ新派の一座に加はり、成功せずして安來節の太鼓打ちとなり萬歳に轉じたもの、その對手の次郎は喜劇役者から……雁玉は難波の袋物屋の職人、素人落語より萬歳に、十郎は五郎の眞實の兄でこれもチンコ芝居にゐたのが喜劇にかはり、小賣樂の弟子となつて樂三郎と名乗り、千日前の彌生座に長らく出てゐるが、四



五年前に驟然萬歳師に……

また奴は京都の染物屋の俵、太鼓叩いて飴を賣つて街を流して歩いたこともある、四ツ竹と踊が得意、千代八は少年の頃より劍舞士となり、松島の立花亭を根城としてゐたが、長じて萬歳を覺ゆ、出羽助は紀州のぬしやの職人で、其後浪花節の港家扇蝶の弟子であつた、一春は小學生から先代芳丸の弟子となつたけなげなもの、文男は活版屋の職工であつたのが落語を辯じ歌路と名乗つて賣り出してゐた。正春は阪神沿線魚崎の洗ひ屋の丁稚より俄師となり萬歳師となる、ヴァキオリンが得意。

女連では稽古屋の師匠から女道樂となつて昔の三友派の高座に現はれてゐた雪江や、神戸の共立檢の小蝶だつた歌江、女劍舞士からの八千代、寄席の中賣からの静江や、堅氣のおかみさんが、極道の揚句になつた春子などがある。

その他に花形とも謂ふのに、藤男と光月、芳子と市松、花子と末子、今男と若菜、米二と政月、久春と文春、照月と菊丸千枝里と染丸、秀子と一蝶、ボテ丸とつばめ、セメンダルと小松月、正二郎と芳若、次郎と志乃武などがある。

### 磨齒煉固スブキ

本品を使用すれば幼時より老年に至る迄齒牙を完全に保つ事が出来ます。

何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのでありますから毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽快になれます。

本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります。有名な百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

- 大形 壹個 金七拾錢
- 大形中味 壹個 金六拾錢
- 小形 壹個 金四拾五錢

ギブス株式會社

日本代理店

株式會社 横山商店

東區豊後町三番地



快感を身に覚え、二度受くる時はその  
 身はすでに眩惑を感じ、中樞神経をし  
 けきし、遂には性のしようどうから

歌江



れ、思はずスピードで芝居裏です。

歌 有がとう。  
 奴 私、萬歳屋ですが、一度貴女の様な  
 妻をめとりたい、私十五年間か、つて

この營業でようやく金一萬圓程貯蓄し  
 ましたが、明日から萬歳をやめます、  
 貴女も止めて僕の妻になつて下さい。

歌 あら、一萬圓も出来たの、では妾な  
 りますが、條件をつけて下さい。

奴 よろしい。

歌 第一、籍を入れて下さい。

奴 よろしい。

歌 第二、遺言状を書いて下さい。

奴 何、遺言状、何と書くんです。

歌 私が死ねば全財産妻に譲ると……

奴 成る程御尤もです。

歌 第三、生命保険へ加入して下さい。

奴 よろしい。

歌 話がまとまれば………汽車又は自動  
 車で。

奴 新婚旅行ですか。

歌 い、え、ひかれて死んで下さい。

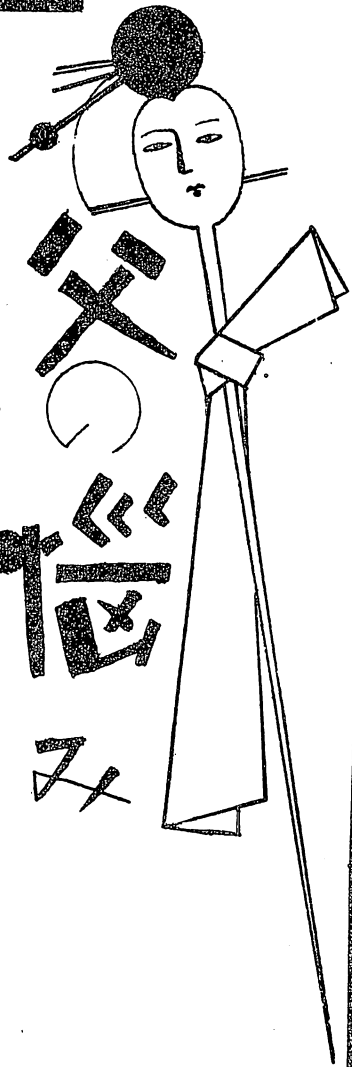
奴 一邊考へ直します。

眼鏡印  
**肝油**





劇壇美話



第一回

市川猿之助の巻

新  
谷  
誠  
水



北陽名妓・若喜代

この戦略には、い、参謀が現はれた、即ち當時の花柳界の五月蠅形、東京と大阪に旅館を経営して、清元界の大御所、延壽太夫すら頭の上らなかつた大内の女將、それから先代小金の佐藤旅館の女將のおちうさん、平鹿の仲居のお喜美さんから旅館を経営した平喜美の女將の三人だ。  
大阪の大内旅館へ、この三人がつかめて、正に聯盟會議だ三對一、然も當時の五月蠅形、この内の一人でも

「困りましたね、僕には絶體出来ない事なんですから」  
若かりし頃の猿之助である、といつても、モウ三十だつたが役者の三十はまだほん子供上り、特に猿之助にはまだ京華中學の學生の味が抜けて切れない頃だ。  
例の特徴の、大きな眼をギョロ／＼むいて、口をへの字なりに結んで、眉宇の間にあり／＼と見える當惑さうな顔、一體猿之助は何を困り切つて、そして苦り切つてゐたのか、この頃の人は女性から、惚れて惚れて惚れ抜かれてゐた。  
女は誰れ？  
その頃の北陽を切り廻してゐた五人組の流行ッ妓の一人、古澤の若喜代が、生命にかけて戀してゐた。  
そんなら、この戀は眞劍だつたか、そうでは無い、當時北陽に覇を争つた五人組、その權勢から行けば、役者の一人や二人

弄り物にするのは何でも無かつたのだ。  
めい／＼が、役者と遊んで、のろけ合つてゐた中に、猿之助の、その頃の坊や振りが若喜代が好きになつたのだ。  
つまり、今の若い燕、然もその頃は、一にも二にも東京かぶれのしてゐた花柳界だ。  
若喜代姐さんは、猿之助を占據する所によつて、五人組をリードしようとしたのだ。けれども猿之助は、その時分から歌舞伎王國中でのインテリだ、自分が好きな女なら、私ビラ切つて旦那にもなつてやらうが、藝者から買はれる、所謂男地獄を極端に嫌つてゐた。  
「いやな事つた」  
若喜代姐さんは、美ン事脈鐵を喰つて了つたが、安々と引下る人でない、生意氣な役者！ よしこつちにもその積りがある  
巧な戦術をめぐらせた。



が首を曲けたが最後、大阪の人氣は、  
 然もその頃の猿之助、父段四郎に別れて、兄弟三人これから  
 の荒浪を乗り切らうといふ難場だ。  
 悲憤の涙!「あつしや藝者が厭なお客を取る積りで……」  
 猿之助は可愛いやお客をとらされた。  
 第一の逢瀬、築地河岸の大内旅館だつた、若喜代はいそくと上京した。

あつしや  
 猿之助

築地河岸の夜景、上げ汐の音が聞こえて、硝子障子越しに月が出てゐる。  
 若喜代には別れられない夜だつた……

これから深くなる……三女將もそう思つてゐるが、好きな女  
 なら、劇壇の位置を投けても、生一本な猿之助だけに、厭なも  
 のはどこまでも嫌だつた、それつ切り、逢ふともしなかつたが  
 若喜代の方は、ほんの遊び半分と思つてゐるのだが、男がすけな  
 くすればする程思ひは深くなつて、どうやら本惚れの  
 形、又の逢瀬をヤイノノとときめ込んで、それから  
 二年目程して、又一度逢瀬。

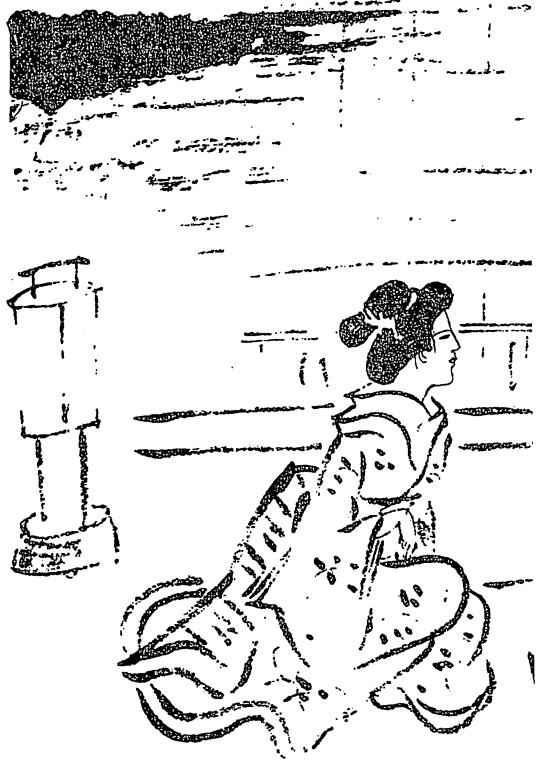
思へば七夕様よりはかない縁ではあつたが。

辨慶もタツタ一度で、おきしが生れた、まして猿  
 之助は二度の逢瀬、もしやあの人の種をと、若喜代  
 が知つた時はモウ五ツ月だ。

猿之助の方では、辨慶ぢやなし馬鹿々々しい、且  
 那があるんぢやないかで、とり合はない。

斯うなると、参謀格の三女將が周章で初めた、大  
 内の女將から、延壽太夫を介して、その時分やかま  
 しかつた猿之助のお母さんにかけ合が初まつた、結  
 局、幾はくかの包紙、延壽大夫がはるく大阪へ下  
 つて話は一旦けりがついたが、生れ落ちたのは常尾  
 といふ女の子だ。





その子が猿之助に生き寫し、お母さんの若喜代には、一人娘の行末の爲にもと、たとへ妾になつても川の字に、もつともな願だが、猿之助は好きな女ぢやないから、どうも話がまとまらない。

「そんなに似てゐるなら」と思つたのは猿之助のお母さんだ、幸ひ家には女の子がないからと、又も人を介して引取りの問題が出たが。

である。

若喜代は、父子三人共に暮らせるなら……  
 常尾さんは、つい先頃まで父には死に別れたものとのみ常にきかされてゐた。  
 然し大きくなるにつけて、猿之助に似てゐるくくの噂さが、とう／＼お父さんが知れて了つた。  
 所謂、父と呼び得ぬ怨み！ 常尾さんは果して、この悲しみに囚はれてゐるだらうか。  
 大阪時代は、女學校から歸るとお下けに制服のまゝ、梅二郎の許へ踊のお稽古に通つてゐた。  
 腕白で、足をなけ出してお坐りをする、そしてギョロギョロ他の仕込の御稽古ぶりを見てゐる格好は、なんの事はない猿之助の女形だ。

「それ又お父さんそのまゝの真似をして……」  
 「梅二郎があけすけに叱ると、あわて、坐り直した彼女

北陽では一奴さんの娘さんが東京で修行をしてゐる、常尾さんも、新橋は河辰中で、藝者の修行をする事になつた。  
 辨慶は、思はぬ娘に廻り合て、御主への忠義は立つたが猿之助は今更しう思はぬ娘の事を洗ひ出されて少し當惑の面持だ。

きのーさんと、一寸立話をしたとだけ、材料少なく、従つてあめやさんをやりました。まことに駄文。

次は延若を書きます。

(筆者)

# 道世京後作考

## (中)の巻

### ○近松徳叟

寶曆二年大阪伏見阪町の娼家、大榭屋勝右衛門として産る。祖父は俳諧師として知られし、元祖一炊庵小野紹連にして徳叟も又俳諧をよくし、俳名を雅亮と號す。幼名を勝助といひ幼少より劇を好みしが時至りて當時名聲高かりし、淨瑠璃作者近松半二の門に入りしが、後に至りて伏見阪町に住す伏算といへる芝居の金主あり、同人の進言にて淨瑠璃作者より歌舞伎作者となりたり。

名を近松徳叟(又は徳三)と號し萬作、五瓶の下に従事せり、年四十四歳の寛政七年始めて立作者となりたり、それより十五年間作者道に従事し、文化七年八月廿三日五十九歳を一期にして大阪に死す。彼は先輩者たる萬作五瓶が餘り手にせざる小説の脚色に妙を得、又隙物を直ちに作し上演す等、創作の才よりは蓋し脚色に秀でしなり、常に萬作

## 瀬川春江

と意氣相和し、合作せし物又少なからず、前章に云へるが如く、傳奇作者に「花より實に入る」と稱せられしは、その筆腕凡ならざるゆゑなり。

彼が立作者となりし翌寛政八年五月四日に伊勢古市油屋に於て、遊客孫福齋官なる者、多くの人を殺害せし事を聞くや、何條歎す可きか、直ちに是れを真相をたしかめ脚色せり。七月二十五日初日、大阪角座にて「伊勢音頭戀寢刃」の名題を以て、二世中山文七の福岡貢、芳澤あやめの女郎お紺にて開演せるに、古今まれに見る大當りを取りたり、是れよりして彼の名聲は浪花の劇壇に高まりしなり、續いて多くの佳作を出せしが、山東京傳が當時小説「稻妻草紙」を出し、その評判浪花の地まで高かりしゆゑ、是れを脚色なし文化五年正月、中座にて「けいせい輝双紙」として、嵐吉三郎の名古屋山三郎、梅津嘉門、佐々良三八にて上演せり、又九月に至り曲亭馬琴の小説、「舞扇南柯夢」を脚色し「弓張

# 近世京後作家考

月」を十一月中座に於て、「島廻弓張月」の名題にて上演せり。

當時淨瑠璃作者にて、小説神史をよく著述なせし司馬芝叟が、友聲と會合の席上講演せし「薙辯」の話しを聞き、直ちに脚色なし、「朝顔日記」と名題迄書したれ共、脚本中の主役たる盲目の深雪に扮する俳優見あたらす、つひに彼の生前上演に至らざりしは残念の事にて然らん。死去なして後文化十一年正月角座にて奈河晴助、右の脚本に修正を加へ「筑紫獄」の名題にて上演せられたり、此の時の深雪は澤村田之助にて、後年朝顔の狂言が澤村家々狂言となりしも、此の時田之助の評高かりしゆゑならん。此の他に彼の傑作は、敵打安樂録、も、ちどり鳴門白浪、淺草靈驗記、けいせい會稽山等々あり。

## ○奈河七五三助

寶曆四年道頓堀福新と云ふ茶屋に生る。通稱新次郎（又は金次郎とも云ふ）といひ、後年日本橋三ツ星末吉屋と云ふ旅宿業を営む、奈河龜助の門に入り作者となる、享和十一年十月二十日年六十一にて大阪に死す。

彼の異名を洗濯物の七五三助と云ふ、餘りにも古狂言の添削を多くせしゆゑならんか、寛政元年正月小座に於て嵐雛助の爲めに「けいせい北國曙」を上演せしを初めに、數種の佳作を出せしが、寛政十二年冬に至り、年四十七歳の折り、江戸中村座へ下り、享保二年十一月大阪へ歸り、中座の立作者となりたり、翌三年冬江戸へ再び下り、河原崎座にありしが、五年には角座に見えたり。彼は前にも記せし如く、創作物少くその晩年は餘り振はざりしが如し。

## ○奈河篤助

泉州の原一向宗の僧なり。選俗して七五三助の門に入り十九助と號す、後に至りて篤助と云ふ、又彼は頭髪赤きゆゑにや狸々の篤助とも云ひたり、最初狂言方として勤め居たり、天保十三年一月三日七十九歳にて京都東山眞葛ヶ原の居に死す。法號釋達應、その伎倆は餘り賞すべき物でなき由、然し彼の本讀は實に妙を得、その席にて聞き入る俳優は自己の役のよきを喜び禮を述べるとあり、いよく稽古に入り又餘りにも自己の役の悪さを知りして云ふ、

# 近世京流作考

是れ彼の本讀に酔われしゆゑならん、又達筆にて且つ當意即妙にて晩年京都に住せし後には、所々の席へ招ぜられ脚本の朗讀をなし居たり、聞く人皆その妙を感じざるはなかりし由。

篤助が京都南側芝居にありし時（寛政八年）徳叟が伊勢音頭を上演し、その評高かりしゆゑ、彼も同じ物語を仕組み、徳叟より十日おくれ八月四日初日にて名題を「川崎踊拍子」として、二世三五郎の遠山齊宮、山下八百藏の女郎お紺にて上演せしが餘り振はざりき、文化五年正月、京傳の稻妻草紙が徳叟の筆にて角座に上演されるや、彼も又是れをば脚色し、「けいせい品評林」の名題にて、中の芝居に出し仁左衛門の梅津掃部、佐々良三八、歌右衛門の名古屋山三郎にて大いに角座と競争せしが、評判ことのほかよく、是れより歌右衛門のため多く筆を取りしが、文化七年同優に招かれて江戸中村座へ下りたり、九年正月同座にて初代櫻田治助と合作にて、「臺頭霞彩幕」（歌右衛門の半七、半四郎の三勝）を出し、同年冬歌右衛門と共に大阪へ歸り、十年正月中座にて「けいせい繁夜話」を出して十一月再び江戸中村座へ下りたり、此時初世歌右衛

門の俳名一洗の名を譲られ、その名を以て出演せり同十一年正月「色情曲輪蝶花形」（双蝶々）の改作）三津五郎の南方にて大當りを取りしが、十二年十一月角座へ二代目奈河龜助と改名出演せり、又々十四年三月江戸桐生へ下り、文政二年元の篤助と名を改め角座に出で、翌三年十一月江戸中村座の金主たりし、大久保今助に招かれて下り、此時は一洗と號したり、同四年五月市川蝦十郎の辨慶にて「御所櫻」を出せし所、意外なる不入にてありしが、金主今助はその罪を篤助にぬりつけしため、彼れは心中面白からず大阪へ歸りたり。

然し彼れは餘りに土地を出這入りせし爲、當時に至りては、や名聲つとに下り、一部の人にはその人をさるゑ忘れられて居たりき、是れを知りし篤助は一洗の名を三世歌右衛門に返し、剃髮して金龜堂一泉と號し、濱芝居の作者となりしが、後年京都眞葛ヶ原に茶店を出し一服一泉と稱したりき、晩年はつとに淋しかりき。先代雀右衛門の作者にて篤助といふ人ありき明治二十年頃にて難波新地に住す。

×  
×  
×

# 近世京後作家考

## ○奈河晴助

天明二年京都に生る。宮島屋嘉兵衛と稱して、素人狂言の作を常に好みたりしが、篤助の門下生となり京都の小芝居に多く筆を取りたり、後年豊晴助と號し、文政九年正月廿九日四十五歳を一期にして死せり、彼れを早世させしは残念の事なりき。

京都にありし頃、西澤一鳳の父利右衛門に進言せられ、大阪の舞臺に出で二世嵐吉三郎の爲めに多く筆を取りたりき、佳作中後世に再演せられし物數種あり。

彼れが三世歌右衛門の自作に助筆せし事は度々なれど、ふとせし事より歌右衛門と絶交したり、二世嵐吉、嵐小六、淺尾工左衛門等の當時の名優に引用せられしは彼の一徳たりしなり。

## ○金澤龍玉

三代目中村歌右衛門の作者名にて、優は人も知る如く初代歌右衛門の實子にて、安永三年三月三日の生れ（又は七年の生れとも云ふ）寛政六年冬、十六歳にて三世歌右衛門の名をつぎたり、天保九年七月

十三日六十一歳にて死す、役者としては天下の名人たりしも、作者としては戯れの業に過ぎざりし様なり、彼の門下に金澤芝助、金澤一洗、濱松歌國等あり、明治二十年頃迄は龍玉の名をつぎし者あり、魁龍玉と號し元は僧侶にて、玉屋町邊に住し常に朝日座にありき、丸本物を脚色するに妙を得し者なりきとぞ。

## ○濱松歌國

大阪の人にて俗稱を布屋氏助、又は清兵衛といひて島の内布袋町に住居す、戯作書多くして専ら歌舞伎の事にくわしく、狂言作者となる始め濱松氏助と稱し、二三枚目の位置にありき、歌國は作名にて颯々亭南水と號す、ある年投者評判記を作せしに、三代目大谷友右衛門、評悪しきとて故障をいひたるゆゑ、その後は評判記を出さざりき、南水漫遊「攝陽落葉集」の隨筆の著あり、文政十年十二月十九日大阪に死す、行年五十二歳、法號花鳥歌國信士と云ふ。

## ○二世金澤龍玉

初世篤助の門人、元助より本助と變り號したり、(三二頁へつゞく)

編輯後記

明朗五月……

復興新派の豪華陣で、中座は斷然若葉月の關西劇壇をリードしてゐる。

中座に於ける伊井蓉峰、喜多村綠郎、河合武雄の新派三巨頭の顔合せは實に十幾年振り、東京五ヶ月の續演に絶讃を博した「二筋道」の續演を始め、復興新派に相應しい「新釋生さぬ仲」及び事實談の劇化「増上寺炎上」の名篇揃ひ……。

浪花座は志賀廻家淡海一派が久々の歸演に新作四篇、中にも支那魂を諷刺した支那軍ナンセンス「呀！珍彈三勇士」は四月の京都座に好評を博したもので、淡海劇の一轉換期を劃するものとして問題視されてゐます。

これについては、京都の桂田曉香氏にお願ひして淡海劇の一轉換「呀！珍彈三勇士」を頂きました。

×

道頓堀前記二座の芝居に對峙して、珍らしくも、

角座は浪曲大會と、八日からは、吉花菱女連と民謡座の合同出演といふ一寸目先の變つたものがある。

レヅユーヤナンセンスものの流行の折柄、特に花廻家華水氏の「大阪の萬歳」を頂きました、萬歳の發祥から、斯界の名人禮讃録は肩のこらぬ面白い讀み物として皆様におすゝめいたします。

新興新派劇に對する、尾崎、森、高谷、倉田、入江、西尾、諸先生の、思ひ出や批判、激勵の言葉はやらやく復興の曙光に恵まれた新派劇の興亡多面を語る珠玉篇！是非皆様の御一讀を！

四月中座に出演してゐた市川猿之助と、北陽藝妓若喜代のローマンス(?)が、劇壇及び世間の人々の間に問題にされましたが、本誌は茲に、新谷誠水氏の厚意に依つて、この真相を發表することが出来ました、尙、新谷氏はこれを第一回として、毎月劇壇人の情話を執筆して下さいになり、來月は實川延若の巻と内定いたしました。

(住田生)

昭和七年五月一日發行

月刊『道頓堀』第七年第六十八輯

◆ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◆ 郵券代用は一刻増にて御註文を願ひます。

◆ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵費五圓)

昭和七年四月廿九日印刷  
昭和七年五月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地  
編輯者 鳥江 鏡也

大阪市東區船場南之町一丁目  
印刷者 北島 竹次郎

大阪市東區船場南之町一丁目  
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹興行株式會社大阪支店  
發行所 道頓堀編輯部

電話(一六二四〇番)  
(一六六四五番)

純白固煉



新發賣

# 御園チタニウム白粉

驚異的

## 新化粧美!

正價 金五十錢

■ 艶麗な濃化粧に ……

目もさめる様な白さ。明るい華やかな澄み切ったお化粧上り。

■ 清楚な淡化粧に ……

うすく溶いても白さが濃く、ノビが平らでムラがなく、さつぱりした美しさ。

■ お襟の魅力に ……

くつきり冴えた美しさ。お召物を少しも汚しませんから快くつかへます。

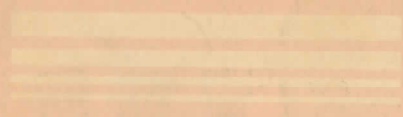
□ 断然優良な新原料が持つ此白さこそ

新日本女性美です!

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和七年四月廿一日發行  
昭和七年五月一日發行  
（每月發行）

「道頓堀」第六十八輯 第七年五月號

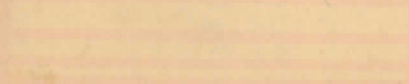
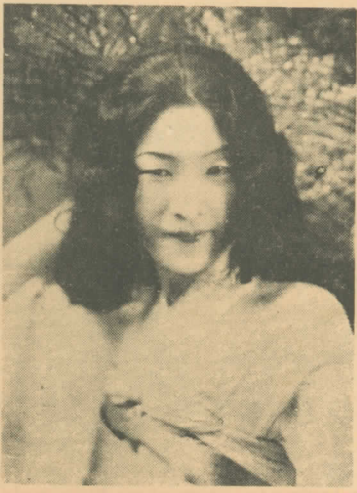
一部 金參拾錢



一キート・ルーオ

# 人情

演主子みす島栗



品作特超マネキ竹松